
青い蝶

伊湖夢巢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い蝶

【Nコード】

N9307R

【作者名】

伊湖夢巢

【あらすじ】

生まれてすぐに、アンドロメダ銀河連邦政府の宇宙船艦に、母と乗っていた貨客船を攻撃され、その際母が行方不明になり、雨雄は間一髪ところで父晴雄に助けられた。

そんな雨雄は、まあまあひねくれず、30歳まで定職に就かず、いつも小型の宇宙船に乗っては銀河のふちを飛び廻り、楽しんでいる毎日だった。

父親の晴雄は、雨雄の母「ルインダ」が死んでからは酒びたりの毎日だったが、仕事だけはこなし、今では銀河系で地球の反対側の、

およそ銀河の4分の1になる第3宇宙域の時間空域をパトロールする、時空局の局長に就いている。

そんな日々を過ごしていた雨雄が、時空局の局長である父の部屋に呼ばれた時、父親のディスクの上に置いてあったディスクの内容を垣間見た所から、雨雄は時空の旅に出る事になった。

登場人物、および地名等（前書き）

本文の前に人物紹介です

登場人物、および地名等

織田雨雄	主人公
織田晴雄	雨雄の父
美奈代	雨雄の義母
ウエスター	雨雄の姉
ルインダ	雨雄の生みの母
あつし	雨雄の21世紀の人
美奈代	あつしの妻、21世紀の人
圭子	21世紀の美奈代の親友
孝一	21世紀のあつしの親友
ビオーヴェ	雨雄のお手伝いロボット
シドフィル中将	USG（天の川連合）艦隊指令
リギュン	雨雄の宇宙船
ザイエルファイ	USG（天の川銀河連合）艦隊旗艦
アコーニー号	若い雨雄とルインダが乗っていた貨客船
ASGU	アンドロメダ銀河連合軍
USG	天の川銀河連合軍
地球	地球です
ペリタン星	義母の出生地
イコムス星	雨雄の出生地
ガジャド星	リギュンが置かれていた星

プロローグ（前書き）

このプロローグ、「雨の物語」読まれた方は「あれ？」と思う割れるかもしれませんが、「青い蝶」ではプロローグなのです

ブローグ

あれは、19歳の夏だった。私は東京であの娘は田舎で学生生活を送っていた。

夏休みに入ってまもないころ、あの娘からの突然の電話にびっくりした。

受話器からは、日頃おとなしいあの娘の口からは想像すらできない言葉が楽しそうに弾んできた。私は半信半疑のまま自転車をこいでいた。

20分も走っただろうか心臓の鼓動を強く感じはじめたそのときに

・

湯島聖堂の前であの娘が、はにかみながら白く細い腕を振っていた。春に別れたときと同じくせのある長い黒髪が風になびいている。

ノースリーブの真っ白な長いワンピースに身を包み太陽の日差しから肌を守るオーガンジーのストールに白い靴。

私の目にはまるで逃げ出してきた花嫁のように映っていた。

「どうしたの・・・？迷惑だった・・・？」と問いかけるあの娘の声でふと我にもどったような気がした。

あの娘を自転車の後ろに乗せて神田川から早稲田へと走った。

面影橋のあたりにつくときあの娘がやつと口を開いた。

夏休みの間おじさんの家に遊びにきたこと。

私宛に春から20通も手紙を出しているのに2通しか返事がこなかったこと・・・。

大きな瞳に涙を浮かべながら便りがないのはゲンキな証拠っておばあちゃんが語ったこと。

でも、・・・といいかけて暫く沈黙の時間が続いた。

そして、女子友達のいということという男性と文通をはじめたことをあの娘は一気にしゃべった・・・。

私とは言え、毎日のアルバイトと仲間で結成したフォークバンド

のことしか話せなかった。

都会での孤独と誘惑などあの娘には想像もつかないことだろうと思
った。

あの娘は「私がここにいる間、キーボードで仲間にいれてよ」と言
った。

私は一瞬答えにつまった。

私の後ろであの娘は清らかな声で歌い始めた。

「一人で空を見ていたら、優しい風に包まれた。どこかで、泣いて
いる人の涙がきつと乾くように。」

私は黙って聞いていた。ただ黙ってそのメロディーを聞いていた。

涙橋に近づくころ雨が降り始めた。

なぜだかわからないが優しい雨のように感じた。

雨に濡れてもあの娘の歌は続いていた。

でも、さすがに雨の中を自転車で走るのは辛くなってきた。

自転車のブレーキをかけると、歌を歌っていた彼女は私の背中にそ
の身を押しつけてきた。

いや、押しつけたのではなく、不可抗力でバランスを崩し、寄りか
かってきたと

言うのが、正解だった。

いつもは前を通り過ぎるだけの、ちょっとしゃれた喫茶店で雨をし
のぐことにした。

入り口を開けると、「カラン」と心地よいカウベルの音が響いた。

第1章 古文書 その1（前書き）

いよいよ本文です。

第1章 古文書 その1

「まったく時空局の奴ら、だらしがねえったらありやしねえ。」

コクピットの中で、雨雄は子供のようにはしゃぎながら、小型恒星間シャトルの後方監視モニターを眺めながら、騒いでいた。

先ほど時空局のパトロール船と遭遇し、雨雄の船の方がパワーの大きい事を良い事に、パトロール船を振り切ったところだ。

「坊ちゃん、ほどほどにしておきませんと、またお父様に迷惑がかりますよ。」と、後ろの機関席で船の機関コントロールをしていた、ビオーヴェが説経じみた口調で、声を掛けてきた。

このロボットは、もともと翻訳用ロボットとして作られ、腕は必要なかったのだが、翻訳用ロボットということで、見知らぬ人の前に出る機会も多く、見た目だけはヒューマノイドの格好の方が相手が親しみやすさが出る、と言う理由から、肩から二の腕を吊り下げるような格好で、腕はついていた。

しかし雨雄にとって、骨董屋でその金色に輝くボディに魅せられ、ふらふらと何も考えず購入したまではまだ良かったのだが、買ったときの興奮もさめ冷静になって来ると、パートナーが欲しかった雨雄にとって、腕の動かない口の達者なロボットは手に余り、何故買ったんだらうと、後悔すら覚えたのだった。

しかし雨雄はとりあえず、腕だけは部品を組み込み自由に動かせる様にし、小型恒星間シャトルの機関システムを、コントロールできるよう操作法を、ビオーヴェのコンピューターにダウンロードし、

機関員として雨雄の船に乘せる事にしたのだ。

「ふん、なあにが親父だ！あの飲んだつくれ！さっさとくたばっちまえばいいんだ。」

「そんな事おっしゃっては、お父様もかわいそうですよ。」

「ふん！、それより追いつかれたときの為に、いつでも全開で逃げられる様、機関を安定させておけよ。」と、言っただけ不機嫌に雨雄は黙りこくってしまった。

それでもなおビオーヴェが、「まったくもう、坊ちゃんは…」と何か言いかけると、「もういいよ、お前は言い出すとしつこいんだからな、まったくどこにいったら翻訳するのに、いちいち説経するアルゴリズムが必要なんだろうな、こいつを設計した奴の顔を拝んで見たいもんだ。」と、

雨雄は毒づいたが、ビオーヴェは構わず、「後先の事を考えずに、すぐ行動するんですから…」と、ここまで言いかけたが、テキスト文で家から通信が入ってきたので、言葉を切った。

義理の姉からの通信で、どうやら家でひと悶着あった様で、「また、あなたのお父様が暴れましたよ。」と、言う内容だった。

ビオーヴェの報告では、なんでも、その騒動でテーブルが再起不能になったらしい、と言う事だが、

「再起不能？」と、雨雄が問い直すと、通信では再起不能とありました。おかしいですよねテーブルは再生不能とは言いますが、再起不能ですと生物に使われる…」

このまま放つとくと何時間でも、ビオーヴェの抗議が続きそうなので、

「これは言葉のあやってやつだよ。」と、雨雄はビオーヴェの言葉をさえぎった。

雨雄にとってこの後の時間には予定が無かった。(まあ雨雄は毎日、一日中ブラブラしているのだから、予定などある筈も無いのだが、)そこで自宅に帰り、親父が何をしたのか、やじ馬よろしく見てやろうと思いたち、

「よし帰るぞ!」と、ビオーヴェに言うのでもなく言って、船のコースを、イコムス星に向け、自宅に帰ることにした。

第1章 古文書 その2

雨雄の船は、イコムスから一光年も離れていたが、一時間足らずで自宅の駐機場の上に鎮座していた。

「お前、船の整備しといてくれ」と、ビオーヴェに言い終わるかわからないうちに雨雄はそそくさと船を降り、地下にある自宅のほうに降りていった。

取り残されたビオーヴェは、「はい、わかりました…、自分の船なんですから少しは自分で整備しようとはなさらないんですね、まったく！」などと、小言を言っでは見たが、既に雨雄はそこに居なかった。仕方なく機関員席から立上りかけていたのを、また席に着き直し、マニュアルを自分のメモリーに呼び出し、手順どおり機器の点検に入った。

さぞ中は凄惨な状況だろうなと思いつつ、自宅のドアを開けた雨雄だったのだが、居間に入って見ると、既に部屋中はきれいに片付けられていた。入っていくと通信をくれた上の義姉である、ウエスダーが寄って来て、

「ウフフフ、面白かったわよ。あーちゃんにも見せてあげたかったわ。」と、言っただけでウィンクして見せた。

彼女は女性でも小柄で、目は切れ長で整った顔をしていて、もし雨雄が年上で他人同士ならば、おそらく何も迷うことなく、彼女を愛しプロポーズしていただろ。しかし今は彼女のそばに居られるだけで良いと思っている、彼女を愛していない訳ではなく、姉弟として愛しているのだ。

先ほどの儀姉の言葉に、ちょっと雨雄がいぶかしげな顔を見ると、

「今回はね、私がテーブルをぶっ壊してやったのよ」と、「ウフフ」と、再び笑って右手でピースサインをして見せた。

小柄な彼女が、そこまでやるとはあまり想像できなかったが、事実、今朝まで居間の真ん中にあった小ぶりのテーブルが消えうせていた。

そう言えば10年前にも、我が家のテーブルが使用不可能になったことがあった、その時、父晴雄は、姉達が晴雄の言う事を無視するので、父親としての権威回復の為への威嚇の為に、これでもかと言う位テーブルを蹴り、拳句テーブルは原形をとどめなくくらい破壊されたのだが、今回はそれを儀姉がやってのけたと言う。

「10年前あれをやられた時、怖かったからね、だから今回、それを私が実演して見せただけよ。」と、こともなげに言っただけだ。

「しかし、何が原因だったんだ？」雨雄が聞くと、

「同居人がさ、ホログラムビジョンを見たかったらしいのに、私が同じ部屋の中でネット通信をしているのが目障りだったみたいで、突っかかってきたの、はじめのうちは、私も無視してたんだけど、しつこくてうるさいもんだから、チラッと10年前された事をふと思い出して、テーブル蹴っ飛ばしてやったの、そしたら妙に気持ちが悪くスカッとして良かったもんだから、こうなったら徹底的にぶち壊してやるうって気になっちゃって、気が付いたらテーブルは原形をとどめて無かったわ」と、半ば笑いが噴出しそうになるのを押えながら話した。

義姉は未だ親父のことを、同居人と呼んでいる、10年来、父親として認めていないのである。

「それにしても片付けるの早かったね」と、雨雄が言うと、

「それはね、まだ続きがあるのよ、私がテーブルを壊し終わるまで、同居人はあっけに取られて見ていたけど、テーブルがばらばらになった頃、我に変えちゃって、お母さん呼びつけて『見て見るお前の娘がした事を、』なんてお母さんに訴えていたけど、お母さんも状況を聞いて、同居人が幾ら説明しても『あなたに筋の通る所は無いわ、』と、言われてふてくされてどっか行っちゃってね、それで結局お母さんも手伝ってくれて、二人で片付けしたから早かったの」と、今度は満足そうに笑顔で言った。そこに血相を変えたビオーベが、どたばたと家の中に入ってきた。

「なんだ、ロボットでもあたふたしていると血相が変わって見えるものだな」おかしそうな顔で、雨雄がビオーヴェに言うと、ビオーベの丸い節穴のみたいにか見えないう目が、今度はキリリとしたかに見える、そんなふうに思えるような態度で、

「私はそんじょそこらのロボットとは出来が違いますからね！」と、きつぱりした口調で胸をはって見せた。しかしビオーヴェは、顔色の変わるはずの無いロボットなのである

ここでその様子を見ていた義姉が、思い出したようにこう口をはさんできた。

「ああ、それからね、同居人が家を出るときに、『これで雨雄も飛んで帰るかな？』なんて一人言、言ってわよ、また何かあんだやら

かしたの？」と言いながら、ビオーベ方に右の手の指を前後にひらひらさせ、挨拶しながら自分の部屋のほうに行ってしまった。

「ところでビオーベ、何なんだ慌てていたようだが…」そう聞くと、

「あ！そうです、忘れていました、船を時空局の方々が持って行くと言って、今上で準備されてますよ」

「なんだって、どういうことだ」

ビオーベの話を聞いてみると、ビオーヴェが船の点検に入ってしまったら、時空局の職員と名乗る人間が、船に入ってきて、

「この機体を押収します、直ちに引き渡しこの機体より出てください」と、押収の為の証明書をちらかされたので、ビオーヴェは主人の命令の次に、法律には従順に作られていたので、さっさと船を降り、雨雄に報告に来たのだ。

雄雨は、もう自分の船は居ないだろうな、と、思いつつも、駐機場が上がってみると、船は時空局の船からの牽引ビームによって、空中に浮き上がったばかりの所で、駐機場には、まだ時空局の職員が残っていた。その職員に雨雄が

「何処に持っていくんだい？」と、聞くと

「この機体は『押収後すぐに破壊しろ』と、命令されています」

「なんだって、だれがそんな命令を…」言いかけたが雨雄は、ここで父親の策略にはまった事に気がついた。

「親父だな？」と、職員に聞くと、案の定、

「そうです、局長命令です」、雨雄と局長が親子である事知っていたその職員は、事務的にさざりと言つてのけた。かえって何かの感情を出して言えば、自分にとばっちりが来る恐れがあつたからだ。

第1章 古文書 その3

「ボタン！」と、かなり大きな音をたてドアを思いっきり開け放し、雨雄は局長室に入っていた。

「おいおい、今度はお前がドアを壊すつもりか？」と、局長の椅子で、まるで雨雄を待っていたのかのように、手に金色に輝くディスクの入った透明な樹脂で出来たケースを持って、それを持て余すかのように手で回しながら、ゆったりと座りながら、やっと来たかという顔をした。

「親父！どういいうつもりだ！」半ば怒鳴りかけながら、雨雄は局長の机までどこかと歩み寄りながら続けた、

「何の手続きも無く民間人の船を奪って、破壊するなんていつから時空局は、宇宙の賊になったんだ」

「まあ、ドアぐらい閉めて来いよ」

「俺にとってドアが開いてようが閉まってようが、どうでもいいこった」と、毒づいたが、再度晴雄に、

「いいから閉めて来い」と、今度は諭されるように言われると、しぶしぶドアを閉めにいった。ドアを閉め雨雄がこちらに向き直り、目が合うと、

「手続きはお前がオカンパを離陸する時から、ちゃんと取ってある。お前が離陸したと聞いたとき、USG（銀河連邦）の艦船に連絡を入れ、お前の船をモニターしてもらっていた」

「それだけじゃあ、手続きとはいえないだろう」

「もちろんそうだ、最近このデルタ宇宙域でも、頻繁に軍事訓練がなされる様になって来ている。それというのも隣の銀河アンドロメダからの歓迎出来ざる客が多くなつてな」

「俺はそんな政治的な話をしに来たんじゃない、俺の船の話をしに来たんだ」

「まあ話は最後まで聞け、お前は星から出発したあと、銀河の淵まで航行して行つただろう」

「ああ、それがどうした、いつも銀河の端まで行つて恒星が少なく小惑星のある宙域で、思いつきりスピードを出し、小惑星を避けながら飛行させるのが、俺の楽しみだよ」

「あの宙域は今軍事訓練中でな、今回、USG艦船にとって追跡を依頼されていた船だったので、無警告でいきなり発砲は無かったが、このままこの宙域に留まれば打ち落とすしかないのですが、という問い合わせが時空局の方に来てな」

「ちよつと待てよ、軍事訓練なんて初耳だぞ」

「お前は宇宙管制官の管制を、いつも無視しているからそうなるんだぞ、これからはこの辺もUSG戦艦が頻繁にパトロールするという事だし、管制官を無視して航行していると、誰何^{すいか}なしでいきなり攻撃つてこともありうる」と、晴雄は言つて、手にしたケースをテーブルの上に、大事そうに置いた。

「なんだつて、それじゃあ、おちおち飛んでいられなくなるのかよ」

「そうだ、USGから連絡が入ってから、時空局の方ではUSG艦隊に随行していたパトロール船を出して、お前を追いかけるふりをして追っ払ったって訳だ」

「しかしそれで俺の船を取り上げ、しかも破壊まですることあ無いじゃないか、越権行為どころか、違法行為じゃねえのか」

「いや船を押収するのは、法的手続きにのっとって行われた、何せお前は無許可で訓練宙域を航行していたんだからな、まだ、USGが処理を時空局に任せてくれたから良いような物の、艦隊が排除しようと思えば簡単にできたんだぞ」

「そ、そうかよ、じゃあその後の船の破壊はどうなんだよ」と、さすがの雨雄も少しうろたえながら、それでもなお抗議を続けた。

何せ、雨雄の船は押収後すぐにイコムスの太陽に向けコース設定され、後に太陽に飲み込まれ、その原形をとどめる事は無かったのだ。

「あれは、時空局から父親の俺が船をもらい受け、俺の個人的依頼で破壊して貰ったのさ」

「畜生よくもやってくれたな」雨雄が毒づいたが、晴雄の法的筋は通っていた。

「暫くお前も大人しくしている事だな」
そこまで言うと言雄は久しぶりに気が晴れたかのように、ゆつくりと椅子から立ち上がり、部屋から出て行った。

取り残されたのは、雨雄と机の上のケースに入った金色のディスクだった。

雨雄は金色の物には目がなく、親父への腹いせのつもりで、そのディスクをケースごとテーブルから引ったくり、部屋から出て行った。

その後、ケースをしまい部屋に引き返してきた晴雄だったが、まさか雨雄が持ち出したなどとは露知らず、探し回っていたが、インターコムで緊急事態を知らせる連絡が入り、その後しばしそのディスクの事は忘れてしまっていた。

そのディスクには古い地球の言葉で「未来の子孫に告ぐ」と書かれてあったが、雨雄はそれを読むべを知らずに持っていたのだった。

第1章 古文書 その3（後書き）

このディスク、現在のDVDなのですが、実際は1000年も内容が保存されないんですよね。

自分ながらちよつと浅はかだったかなあ。

でも、読んでくれる人は、内容が1000年もったと思って頂きたい。

第2章 リギユン その1

「おい！ビオーヴェ、これ何だかわかるか？」、と言って、先ほどから持て余すかの様に手で回している、晴雄の部屋から持ってきたケースに入った金色のディスクを、自分の部屋の椅子に掛けながら見せた。

ケースに入ったその金色のディスクは直径およそ8cmで、透明樹脂製ディスクの片面に金色の塗装幕のようなものが塗られており、塗られている側の表面にはなにやらどこかの古代の文字が書かれていて、裏から見ると塗装膜が樹脂を通し金色にきらきらと輝いて見えた。

雨雄が手で回すその様子は、晴雄と雨雄、両方を知っているものが見ると、さすが親子だな、と失笑するだろう、そのくらい同じスピード、同じ指でまわしていた。

しかしそう聞かれ今まで笑いもせず、人間の骨格標本よろしく、上からまっすぐ吊るされてるかのようになり、じっと雨雄の横に立っていたビオーベが覗き込んできた。

「しばらく待ってください」、ビオーヴェは自分のメモリーの中をサーチし始めた。

ビオーヴェの記憶装置はシリコンのメモリーのみで、衝撃に弱いと言う理由から、回転ディスクを利用した方法は採用されなかったのである。

しかし記憶容量は、人間をはるかに越えるものだったが、やはり

物には限界と言うものがあり、容量を越えた分については外部にバックアップを取るか、ビオーヴェのAI回路によって不要とされる記憶（記録）については、削除されていった。

ビオーヴェそのものは、地球人類が宇宙に出るはるか前、いまだ銀河の覇権争いが混沌としていた頃に作られており、その記憶（記録）はもはやメモリーに収まりきるものではなかった。そんなビオーヴェのメモリー中にこのディスクに関し、幸い少しだけ記憶（記録）が残っていた。

「それは私の記憶では、今からおよそ1200年くらい前、あなた方の先祖が地球で使っていたものだと思われます」

「ほう、お前にこれが何か判るのか」

「完全ではありません、そのディスクの名称とおおまかな使い道くらいです」

右手の人差し指と中指ではさむようにケースを持ち、「で、これは何なんだ？」と、ビオーヴェの目の前にかざした。

のぞきこんでいたビオーヴェが背筋を伸ばし、また骨格標本みたいにまっすぐ立ちなおし、

「それは、デジタルビデオの記録媒体で、通称DVDと呼ばれていた物です。主に映像を記録するためのものでした」

「なんだそれだけか、もっと詳しい事は判らないのか？」ちよつと雨雄がいらついで聞くと、

「記録するのは専用レコーダーで行われていたようで、レーザー

で読み書きされていたようです、残念ながら地球でもこの記憶媒体はすぐに使われなくなり、今では何が記録されていたか、読み取る事は難しいでしょう」

「そうか、ところでこれは何とかいてあるんだ？」ディスクに直接書かれている文字を、指し示しながら雨雄は聞いた。

「ディスクの内容を今読めと言われると無理ですが、その表面に書かれていることなら私の仕事領域ですから簡単ですよ」

ビオーヴェがさも得意げに言ったので、雨雄は、

「なんだって、じゃあさっきからお前はここになんて書いてあるのか判っていたんだな、今回はなぜ黙っていやがったんだ、いつもは俺が黙れと言うまで雄弁に喋りまくるじゃないか」

「それは坊ちゃまが何かについて聞かれると説明はしますけど、聞かれても無いのにペラペラとお喋りをする、それこそお喋りなロボットと言われるのは必然で…」と、止まらなくなりそうになってきたので雨雄が、「わかった、わかった、だから今聞いてんだよ、さっさと読んで見せるよ」

「それはですね、そのディスクが作られ頃、地球にあつた「日本」という国の言語で書かれていて、「未来の子孫に告ぐ」と、読めます」と、ちよつとビオーヴェがもったいぶっていった。

「それは俺たちにとって事かな」と、独り事のように雨雄が言つて、後を続けた。

「お前、中身を読むのは難しいと、言つたよな、読めない訳じゃ無いんだな」

「そうですね、レコーダーをレプリケートすれば何とかなると、思っています」

「よしそれじゃあ、お前そのレコーダーってのを作ってくれ、俺はちよつとカジヤド星まで出かけるからな、それまでに何とか読めるようにしといてくれ」と、雨雄は言い、そそくさと出かける準備をし始めた。

「めんどろな事は人に全部押し付けて、自分はいつも気ままにするのですから、で、今日は何しに行くのですか？」どっちが主人だか分からない様な言い方をビオーヴェがした。

「決まってるだろうが、船を捜しに行くんだよ」と、面白くなさそうに言った。

「でも、船がもう無いのにどうやってあの星まで行くのですか？」

「世の中には定期便ってのもあるだろうが」

「それもそうですね」と、ビオーヴェが納得したが、

「レコーダーをレプリケートするのはいいのですが、レプリケートしようにも現物か、その設計図が無ければ無理ですよ」と、雨雄には適切な返答を期待はしていなかったが、とりあえず聞いてみた。

しかし雨雄は、「お前の方が詳しいんだろ、どっかで調べて見ろよ、国立図書館とかさ、何でもあるだろう」と、雨雄としては、わりとまともな返事が返ってきた。

「なるほど、そう言う所もありましたか」と、ビオーベは納得し、家のコンピュータにネットワーク通信をはじめべく、コンピュータに命じた。

ここ50年位前から、全銀河中のコンピュータをネットワークでつなぐ事が出来る様に、各星域の大きなアカデミーが中心になって進めてきたが、USGは反政府テロリスト達の恰好な暗号通信手段として、使われると言う意見がUSG議会の中に根強くあり、議会からは反対されていた。

しかし、それが40年前突然、隣の銀河の国家である、ASGU（アンドロメダ銀河連邦）からの攻撃を受けた時、彼らは攻撃の常とう手段として、まずUSGの通信施設を破壊していった。

既にその頃までには、各星域間のコンピュータネットは、USGの通信施設と、はまったく別の独立した通信回線を使っていて、その事まではASGUに、感知されていなかったので、ネットワークはまったく無傷であった。

USGの通信は断絶されたものの、アカデミー間のネットワークにより急襲を受けたことを、銀河中に警告でき、最悪の場合USGそのものの存続に関わるくらいに、被害を受けていたかもしれない攻撃を、大きなダメージを負わずに撃退でき、ASGUを撤退させる事が出来た。

その事件があつてからは、USG政府がネットワーク構築の支援にまわり、ネットワーク技術も急速に進み、回線もワーム通信回路を専用に使えるようになり、今日では天の川銀河中のほとんどのコンピュータが、リアルタイムでつながれる様になっていた。

今では、第三宇宙域のイコムス星に居ながらにして、第一宇宙域にある、地球の博物館のコンピュータデータにアクセスできるのだ。

「ネットワークログオン完了」と、自宅のコンピュータが金属製の声で告げてきたのは、雨雄が部屋を出て行った後だった

第2章 リギyun その1（後書き）

東北関東大震災でもコンピュータネットワークが、通信手段の一つとして活躍してますね。

現在では、主に電話回線がメインなので電話線が寸断されるとネットワークも死んでしまいますね。

JAXAが遅まきながら、ネットワークの支援に入った事を聞きました。

何はともあれ、被災された方々の安全と健康をお祈りいたします。

第2章 リギユン その2

「お客様はどちらまで行かれるのですか」と、定期旅客便の搭乗待合室で、制服を着た警備員に聞かれて、

搭乗チケットをちらりと見せながら「カジャドまでだが、今はどこかに行くのにもいちいち誰かに許可がいるのかね?」と、雨雄は（なんだ親父のやろうこんな所に手をまわしやがって、俺をイコムス星から一步も外に出さないつもりかよ）と、心の中では動揺しながらも、顔は平静を装いながら聞き返した。

「いえ、最近はASGUのテロリストなどによる、テロを警戒する為に警備を強化し、不信人物のチェックにあたっています」

「それじゃあ何か?俺が不信人物だって言うのか」と、雨雄が顔を前に突き出し、不愉快さをあらわにすると、

「いえいえ、これはあくまでも形式的なものでして…」と、語尾を濁らしながら言ったあと、あれでも本人は警戒しているつもりなんだろうが、周りをキョロキョロト怪しく見まわしながら去っていた。雨雄は、（あれじゃあ警戒している警備員の方が、よっぽど怪しいぞ）と、思いつつカジャド星行きの搭乗がはじまっていたので、搭乗口から恒星間シャトルバスへ乗り込んだ。

カジャド星で、雨雄は以前行った事のある骨董屋によって見ることにした。イコムス星とは違いカジャドは第三宇宙域の商業、交通の要所で、新しいものから古いものまで、また、小さいものから大きいものまで、ありとあらゆる物が、ここに集まり売りさばかれて

いる。

以前からこの骨董屋にある、ボディが黒っぽい銀色をした一隻の小型宇宙船らしきものが気になっていた。折があればその船を手に入れたいと思っていたのだ。今回、晴雄によって雨雄の船を破壊された事によって、この銀色で黒く光っている機体をぜひ手に入れようと思ってきたのだ。

「オヤジちよつと、あれ見せてくれないか」と、その船を指差しながら店のオヤジに言つと、

「ああ、またあんたか、今日は何だね」と、雨雄の指差した先を見ると、

「あの船か、あの船は売り物にならないのだよ」と言い、大きく手を左右に広げ、肩をすばませ少し吊り上げて見せた。

「それは何故だ、俺じゃあだめだってことなのか」と、雨雄が不服そうに聞くと、

「いや、そうじゃない、あんた以外でもだめなんだ、たとえば政府の偉いさんでもだめなんだ」と、手を顔まで上げ左右にひらひらさせ、こう続けた。

「あのマシンは時空恒星間ガンシップでな、何でも前の持ち主によれば戦闘も出来ればタイムマシンとしての機能もあるので、時空航行も可能だと言っていた」と言つと、「法的に何か許可書が要るってことなのか？」そう雨雄が聞き返した。

「いや、大きさや装備から言つて法的には何も問題は無い」と言つと、雨雄が、

「それじゃあ俺の飛行技術が問題だってことなのか」と、少しいらいらしながら聞くと、

「まあお若い、そうせき込んで聞かんでも、ちゃんと説明してやるからちよつとゆつくり聞きな」と言うと、店の事務所のほうに歩き始め、話の続きをはじめた。

「あの船はおそらく誰にでも操縦できるだろう、ハッチさえ開いて操縦席に座る事が出来ればな、しかし前の持ち主がここに持ってきた時、既にハッチはロックされていて、今まで何にも人間が開けようと試みたが、みんな諦めたのさ」

「じゃあそんな代物、なんでこんな所にいつまでも置いてんだよ」と雨雄が聞くと、

「おまえさん、何か忘れていないか、ここは骨董品屋だぞ、骨董品なら使いもんにならない物でも、骨董価値があればおいとくさ」と、「どつこらしよ」と言いながら、事務所の椅子に腰をかけた。

「そうか忘れてたよ、ここが骨董屋だってことを」少し残念そうにうつむいてそう雨雄が言うと、

「話はまだ続くんだが、もう諦めるか、お若いの」と言いつつ、雨雄にも椅子を勧めたが、雨雄は軽く手をあげそれを断り、「続きがあるとは、それはどんな事だい？」と尋ねた。

「あの船を持ってきた旦那が、こう言ってたよ」

「この船はわけあってロックされているらしいが、キーはイコムス星にあるらしい、だがそれはどんな物か知らない」と、

ここまで言つて、ふと骨董屋のオヤジが雨雄の顔を、まじまじと見てこう言つた。

「もうあの船を引き取つてかれこれ30年近くになるが、俺はこゝう見えても結構、物覚えがいい方だな。今、ふとあの船を持ち込んだ旦那の顔を思い出したんだが、お前さん、その旦那にそっくりだな」と、さもこれほど似た者がいるかという顔をして、一人感心していた。

「オヤジ、そいつの名前、ひょつとしてODAとか言わなかったか」と、雨雄が聞くと、

「さあな、名前までは覚えてないな、でもちよつと待つてろよ」と言い、コンピューターに向かつて、「No.78346の物件の持ち込み主は誰だ」

「氏名、織田晴雄、住所、イコムス星それ以上の住所不明、職業、不明、年齢、不明、持ち込み理由、不明です」とコンピューターが答えると、オヤジは、

「なんだ、名前とイコムス星から来た以外わかんねえのか」

雨雄が「けッ、何が不明だ、名前知つてゐる奴が聞いたら全部判ちまうぜ」

「ん！お前そいつ知つてんのか？」とオヤジが聞くと、

「ああ、知つてゐるさ、そいつはもう死んじまつてこの世に居ないさ」と、さもおかしそうに「があはあはあ」と、馬鹿笑ひした。

第2章 リギユン その2（後書き）

雨雄は、晴雄をよほど亡き者にしたいらしい…

第2章 リギユン その3

「ざまあみやがれ、殺してやったぞ」と、自分の部屋のドアを開けながら、そう雨雄が言いながら部屋に入っていくと、それを聞きつけたビオーヴェが

「何ですって、どなたをお殺しになつたんですか」と、その早くも無く、どちらかと言えばたどしい歩きのビオーヴェが、さも一大事だと言う体で、自分では急ぎ足のつもりで、部屋の中にある大小の箱を避けながら急いで寄つて来た。

「お前、お殺しは無いだろう」と、思い出し笑いをかみ殺しながら、ビオーヴェに反論らしきものを、雨雄はした。

「今度は何をなさつたのですか？」と、ビオーヴェが改めて聞きなおした。

「何、ちよつとカジヤドまで行つて、親父を殺して来てやったさ」

「おお！おお！お坊ちゃまは何という事を」と、ビオーヴェは思いつきり嘆き、そして、

「ああ！大変だ死刑になる、いやその前に裁判がある、ああその前に警察が来る」と、訳が分からない事を言い出した。

「お前、回路が狂つてきたのか」まだ含み笑いになりながら雨雄が言った。

雨雄はカジヤドの骨董屋をあれから後まもなく出た。

幾らあの船を自分のものにした所で、動かす事はもとより、機体の中に入る事すら出来ないのではどうしようもなく、仮に自分の物にしてもいいが、あの機体を動かすキーを雨雄が知っていると、骨董屋の親父は言っていたが、雨雄にそれを聴いたところで、絶対答えないだろうなと、雨雄は思っていた。

いまいましくは思ったが、骨董屋のオヤジに言った自分のあの一言で、かなり気分を良くして、帰りのシャトルの中でも笑顔が絶えなかった。5、6歳位の男の子が雨雄に寄ってきた時、普段の雨雄ならいかめしい顔をして子供を威嚇し、追い払うのだが、そのときの雨雄は追い払うどころか、「ぼうずどこに行くんだい」と、頭さえ撫でながら話しかけていたのだった。

きつとこの光景をビオーヴェが見たら、ビオーヴェのAI回路は本当に狂っていたかもしれないが…。

「まあ落ち着け、本当に殺して来たわけじゃないさ、骨董屋のオヤジに、織田晴雄はもう死んじまってこの世に居ないって、言っただけさ。ところで例のディスクの内容は読めたのか？」と、雨雄ここまで言っただけで、ビオーヴェは落ち着きを取り戻したが、

「それでは、警察の捜査などはないんですね」と、なおも聞くので、

「そうだよ、死んじまったと言っただけで、本当に殺したわけじゃないさ。お前、何をそうびくびくしてんだよ」

「坊ちゃまは時々とんでもない事を平気でおやりになるから、私としても気が気じゃありませんので」と、なおもビオーベはつづけた。

「悪かったよとんでもない事で、ところでさっきから聞いてるんだが、ディスクの方はどうなったんだよ？」と、雨雄が再度聞くと、

「再生の方は出来るようになりました、ただディスクの方は、すでにお父様が持っていていかれてここにありません」

「なんだって親父のやつ、もう見つけて持って行きやがったか」と、今にも足元にある箱をけとばそうとしたので、大慌てでビオーベがそれを制して、

「おやめください！この箱の中にはガラスの管が一杯入っています。前面には剥き出しになった管もあります、それが割れると大怪我なさいます」と、むこう向きになっていたその箱をこちらに向きを変え、正面を見せながらそう言った。

その箱は前面が丸くくりにかれていて、そこにフラスコの底をこちらに見せるような恰好のガラス管がはめられていた。また箱の中には直径数センチの薄いガラス管が基盤に差し込まれていて、中に電極がありその一部が光っていた。

雨雄が部屋の中を眺め回すと、他に箱が大小4つ置いてあり、他にキーボードがひとつあった。そのどれも古めかしい物ばかりで、思わずお雨雄が「お前、骨董屋でも始めるのか」と、言ったほどだった。

第2章 リギユン その3（後書き）

フラスコの底、いわゆるブラウン管ですねえ。

今では、液晶がP C モニターの主流になっていますが、この小説を書いた頃はブラウン管のモニターが主流だったんです。
あしからず。

第2章 リギユン その4

ビオーヴェは置いてある箱についてひとつひとつここにあるのは理由があると言って、ひとつずつ説明を始めた。

まずおっしゃる通り、みな古代の地球の物だという。

一番むこうにある40センチ四方くらいで厚み5センチくらいの黒っぽい箱は、DVDプレーヤーと言い、これで昔、DVDを再生して見ていたのだそうなのだ。

しかし、この機器単独では画像を見られ無いという事が判り、見るためにはテレビジョンという機器が必要である、という事を判り、今度はこの俗に言うテレビの設計図を取り寄せて作ったのが、それが先ほどもう少しで雨雄が蹴ろうとした箱だった。

しかし、この箱のテレビは地球上で普及した物ではなく、テレビというものの可能性をテストするための、最初の実験用に作られたものだったので、とても先にレプリケートしたDVDプレーヤーの映像を、映し出せるだけの能力は無かった。

そこで再び調べ直し、普及していたテレビを見つけ、レプリケートしたのが、この箱の中で最も大きいこの箱だという。

見ると実験用に作られたというテレビの、映像を映し出す、という所はまさにフラスコの底で丸いが、この普及型テレビは前面のガラス面も平らで四角く角張っていた。

ここまで黙ってつまらなそうに説明を聞いていて雨雄だが、

「それでお前はこれで再生して、映像を見たのか？」とビオーヴェに聞くと、

「いえ、データが壊れていますと言う表示が出で、再生できませんでしたので、更にネットワークでDVDの構造そのものを調べて見ました所、古代地球ではパーソナルコンピューターといわれる家庭用の、小型コンピューターが普及していたそうで、それはパソコンと呼ばれていたそうですが、そのパソコンでDVDのビデオデータなどを編集したり読み書きしたりできる事を突き止めました」と、さも得意げにここまで一気にまくし立てた。

「しかし、もう肝心のディスクがなきゃ、お前の努力も無駄だったな」と言つて、試験用のテレビを真横から自分の足は怪我の無いように、蹴飛ばすと「ガッシャーン」とガラスの部分全て砕け散った。

「まったく、すぐ何かにあたるんですから、坊ちゃんは……」と、言いつつ掃除用ロボットを室内に呼び寄せ、後始末を命じて、雨雄に

「もうあのディスクは必要ないんですよ、ディスクに入っていたデータは、あのパソコンの中に移し終わっていますから」と、ここで人間なら、したり顔になるのであるが、ロボットであるビオーヴェは無機質、無感情の顔でさりと云った。

普及型のテレビにも足を掛け、こいつも蹴飛ばすと割れるかなと思っていた雨雄が

「ん！今なんてった、どういう意味だ」予期せぬビオーヴェの言葉に、言葉の意味の説明を雨雄は催促した。

「ですから、あのディスクの中で読めるデータは、全てあのパソコンの記憶装置、え〜と、ハードディスクって言いますが、そのハードディスクにダウンロードしておきました」と今度はしたり顔で、いや、やはり表情の無い顔で、ビオーヴェが説明した。

「何故それを先に言わないんだ、先に言ってりゃテレビも壊れなくて済んだのに」と、まるでビオーヴェのせいでテレビが壊れたかのような言い方をした。

雨雄にとってあながち間違っていないのかもしれないのだが。

「いつも坊ちゃまはおっしゃるじゃ無いですか、話は順序だてて話せて」ビオーヴェが抗議したが、

雨雄は無視して「それじゃあ早速再生して見せろ」と、パソコンの前に陣取った。

「時間は5分足らずしか残っていませんでした、どうやら最初の方だけで、後は年月が過ぎディスクそのものの劣化によってデータは失われてしまったのでしょう」と、ビオーヴェは前置きして、再生ソフトを立ち上げ、再生を始めた。

内容は、最初に二人の人物が写り、私たちは夫婦であるといい、男の方は「織田あつし」と名乗り、女の方は妻で「みなよ」と名乗った。

男の方が、ある人物により、妻が重大な遺伝子的欠陥を負い、これはこの時代ではとても治療できるようなものではなく、またこれは遺伝すると、言うものだった。

このディスクは今後子孫の治療のために、何が起きたか知らせる為に残します。と、言った内容だった。再生できる映像はこれだけだった。

第2章 リギユン その4（後書き）

「雨の物語」と繋がって来ました。

第2章 リギユン その5

映像を見た後、雨雄は黙りこくってしまった。何か考え物をして
いるようで、所在なげに自分の部屋だけではなく、家の中をうろ
ろしていた。

その様子を見ていた義姉のウエスターが「あんたからスターシップ
を取ったら、何にも残らないのね」と、何があったかのかも知らず
にからかっていたが、そんな言葉さえ耳に入らないかのように、い
つまでも家の中をうろろろしていた。

ほぼ丸一日たった頃、やっと口を開いた。しかも独り事のように、

「やはりあのマシンが必要だな、しかし…」と言って、ビオーヴ
エを見据え「さすがのお前でも今度は無理だろうな」と言った。

「何が無理なんですか？」とビオーヴエが尋ねるので、カジヤド
で聞いたことを全て話して聞かせた。

「そうでしたか、私も以前、船のキーになっていました」と言っ
た時、雨雄の顔が一瞬明るくなり「もしかしてお前がキーなのか？」
そう聞いた。

「いえ、おそらく私が乗っていた船とは違う船だと思います、私
が乗っていた船から降ろされたのは、もう300年ほど前になりま
すし、その船は時空航行等は出来なかったです」と言い、俯いてこ
う続けた。

「その船の最初の御主人が亡くなる時、この船は常にお前と共に

あれ、という事をおっしゃり、私がいればその船は動くように船と私を、それぞれ改造し、リンクしてくれました。3千年以上一緒にその船と飛んでいたのですが、ある代のその船の御主人のとき、お前はうるさいという理由から、代わりのキーボックスを作り、私を行商人に売り飛ばしてしまっただと、初めて雨雄に自分の過去を話した。

「そうか、お前にはそんな過去があつたのか。ロボットに聞くのもなんだが、今は不幸か？」と、雨雄はビオーヴェの顔を覗き込んだ。

「いえ、とんでもございません、あなたは最初のご主人様に性格がそっくりです、私は坊ちゃんのことが好きですし、坊ちゃんに引き取られた事を幸せだと思っています」と、顔をあげ真っ直ぐ雨雄を見てそう言った。

「そうか、似てるか」と、嬉しく思いながらも、しみりとビオーヴェを氣遣うようにぽつりと言った。

だがそうそうロボットとしんみりした話をしても、時間つぶしにはなるが、雨雄にとってあまり面白い事ではなかったのだ、とりえずビオーヴェとその船をもう一度見に行こう、と云う事になった。

しかし、今日の定期便の最終便はもう出た後だったので、明日まで待たなければならなかったが、雨雄は思い立ったらすぐ行動したい性質なので、そういうふうに明日まで待たなければならないのが苦手だった。

そこで雨雄はウエスターに事の経緯を話し、カジヤド星へ連れて

行ってくれるよう頼んで見た。ウエスターは「いいわよ、カジヤド星の友達の所に行きたいと思ってたから、ついでにそっちにも寄ってみるわ」と、快く承知してくれた。

早速二人はビオーヴェを連れウエスターのシャトルでカジヤドに行き、その骨董屋を訪れた。

そして、ビオーヴェが船を見るなり

「オオっー『リギユン』だ！『リギユン』じゃないか」と急に大声を出しその船にたどたどしい足取りで駆け寄った。

その船こそが300年前までビオーヴェが乗っていた船『リギユン』だったのだ。

第2章 リギユン その5（後書き）

ビオーヴェとリギユン、運命の再会ですな。

ビオーヴェのAIって、感情があったんかいな。って、自分が書い
といて、すみません…

第3章 母 その1

「リギユン開けておくれ」と、ビオーヴェが言ったが、リギユンのハッチはぴくりとも動かなかった。

「お前、呪文間違えたんじゃないのか、たとえば『開けごま!』とか?」と、先ほどから興奮して船に駆け寄ったビオーヴェに対し、からかうつもりで言った。

雨雄には駆け寄ったように見えていたが、実際には人の足でせいぜい早足程度の速さで船に近づいただけではあった。

あまりにもビオーヴェがせかせかと上半身を左右に振り、まるで人が興奮して小走りに駆け寄ったように見えた。

ビオーヴェにとっては確かに駆け寄ったのだったが、その様子はこっけいに見えたのだろう。

「いえ、私とのリンクが完全に切れています。と言うより、リギユンそのものが完全に機能を止めています」とビオーヴェが言うと、そばで聞いていたウエスターが

「その『リギユン』ってのはこの船の名前なの?」と聞くと、

「ハイ、お嬢様、もともとこの船は型式をH729-1型の船なのですが、初代ご主人様は、『鷲』とか『鳶』とか『鳶』とかいう意味の名前をつけられましたが、57代目のご主人様が地球のドイツの方で、雨がしとしと降る様子が大変好きで、お国の言葉で『雨が降る』と言う意味の『リギユン』と言う名にしたのだそうです」と、その

名前の由来を語った。

そして更に自分も、58代目の主人に今の名前を付けてもらったのだそうで、それまでは記号と数字の羅列だったので、ビオーヴェ自身も気に入って今の名前を使ってもらおうよう、主人が変わるたびに願い出ていた。そしてその意味はつけた人がイタリアの人だったので、

リギンとそろいの意味で、イタリア語で『雨』と言う意味の『ビオーヴェ』とつけたそうだ。

「そう言えばあーちゃんも雨の男ね」とウエスダーがアマオの方向かい笑顔で言い、

「あなた達は、この船も含めてだけど、どうやら何百年も前からここで再開する事が運命づけられてた様ね」と、感心するように続けた。

「まあそれはいいんだけど、ハッチが開かなきゃいくらここで出会っても、意味がねえよ」、雨雄は返した。

しかしいつも雄弁なビオーヴェはそれに答えず、機体後部にある下向きに開くであろうハッチに近づき機体表面を眺め、なにやら捜していた。

そして探し物が見つかったのか「ありました、やはりこれはリギンに間違いありません」と言い、自分の手のひらにあるちよつと出っ張ったランプ状の物を、その機体のハッチの横にあるくぼみに押し付けた。

手のひらの出っ張りとは機体のへこみは寸分違わずぴたりと合った。

それがスイッチなのかと、雨雄は期待して待っていたが、相変わらずハッチは閉じたままで何も起きなかった。

「なんだお前、キーを首になったんじゃないのか」と、雨雄が屁理屈にも似たような事を言った。

「いえ、今、リギユンのサブ起動コンピューターにアクセスしましたが、リギユンは長期の放置に加え、意図的にここに置かれる直前全てのエネルギーを放出されていて、現在はサブ起動コンピューターを動かすエネルギーすら、無い状況の様です」と言って、機体から手を離れた。

「何、それじゃせっかくキーのお前が居てもこの船は動かないのか？」と、さっきまでワクワクしていた気持ちがいつぱんに冷まされてしまった雨雄は、周りを見回し何にあたってやろうか探し始めた。そんな雨雄の様子を見ていたウエスダーが

「まだ何かビオーヴェに続きがあるようよ」と、ビオーヴェに注意が向く様仕向けた。

「有難うございますお嬢様、もし坊ちやまの注意をこちらに向けてくださいなければ、今ごろ何がガラクタになっていたかわかりませんでした。」と言うと、

「どうせここにはガラクタばかりさ」と、先ほどから三人、（もつとも一体はロボットだが、）の後ろで黙って様子を見ていた骨董屋のオヤジが後ろから答えた。

「あつ、いえ私はここの物がガラクタだなんて思ってた訳では…」とビオーヴェが言葉を詰まらせたのを見て、オヤジは「何、そんな事は分かってるさ、ちよつと言ったまでさ」と、「ははは」と、笑った。

「続きって何だよ」と、まるで駄々をこねるように雨雄が聞くと、

「今からこのリギユンの起動手順をお教えます。しかしこのリギユンは今この骨董屋のご主人様が持ち主なので、骨董屋のご主人様の承諾が必要かと思いますが」

「俺は別にいいさ、かえっていつまでも動かないままでここにあると、それこそガラクタ同然だからな」と、オヤジが答えたので、

「それでは起動して見たいと思うのですが、私では物理的に起動工程を実行できません。みなさん協力お願いします」と言って、起動工程の説明を始めた。

はじめに雨雄にハッチの横にある小さなハッチを開けるといった。その中にレバーがあるのでゆっくりでいいからそれを引けと言う。雨雄は言われるがままにその小さなハッチを開け、レバーをゆっくり手前にひいた。

するとその機体の内部で、ウィーンというまるで電動モーターを手で回したときのような音が聞こえてきた。

一度引つ張りきつたがもう一度と、いわれ2度目に引つ張りきつたとき小さなハッチの横にあったランプが赤く点灯した。そこで更にビオーヴェはもう少しですもう一回と雨雄にもう一度引つ張る様言った。

もう一度引つ張ると、ランプは赤から緑に変わった。

変わると同時にビオーヴェが「やりました、リギユンのサブ起動コンピューターとリンクが無線で確立されました」と言つと、「それで、そのサブ起動コンピューターはいつハッチを開けてくれるつて言ってるんだ」と雨雄が聞くと、次はメインの起動コンピューターを起動し、更に自家発電装置を動かしその後、リギユンそのものを起動させる準備をと言つた。

第3章 母 その2

「なんだよ、まったく、えらく手間の要るこったな」と、雨雄はそれを聞いてあきれた。

「ハイ、普通ならここで内部に残っているエネルギーを使いハッチを開ける事が出来るのですが、先ほども申し上げたように、完全にエネルギーが0だったものですから、まったくの初期の状態から始めなければなりません」

「なるほどね、それで、次はどうするんだ」と、雨雄が聞いた。

今度は機体の四隅に、先ほどのようなレバーより一回り大きいレバーが入ったハッチが4ヶ所あるので、それを引くとビオーヴェが言った。

ビオーヴェ以外三人がそれぞれ隅に散らばって見ると、それぞれハッチがありその中にレバーがあった。雨雄と骨董屋のオヤジは先ほどの雨雄が引いたレバーより重かったが、難なくレバーを引けたが、ウエスダーは小柄で女性と言うこともあり、引くことはままならなかった。

「お嬢様の所は結構です、2ヶ所充電すれば行けますから」と、ビオーヴェがウエスダーに言った。

雨雄と骨董屋のオヤジは先ほど雨雄が引いた回数と同じく三度目でランプが緑色になったので、それぞれ「グリーンOK!」と、その場で叫んだ。実際は疲れてその場から暫らく動けなかった。

その言葉が終ると同時に、リギユンが発電用ジェットエンジン始動のための警告を、スピーカーから流した。

「発電用ジェットエンジンを起動します。」渴いた女性の声を模したような声が聞こえてきた。そして雨雄たち機体の下に居たので見えなかったが、機体上部の前後の一部が二ヶ所開いた。一ヶ所は空気取り入れ口、また一ヶ所は排気口だった。

続いて、「空気取り入れ口、および排気口近くに居る方は退去してください」と、アナウンスが流れ、暫らくするとイグニッションモーターのウィーンという唸る音が機体から聞こえてきた。

その音が甲高くなっていったが、その音が最高潮に達する前に、モーターの唸る音が止まり、ジェットタービーンファンの風を切るだけの空しい音だけになり、静かになった。

「起動電力が不十分です、再度充電してやり直してください」と、先ほどエンジン始動のときに流れた声と同じ声が聞こえた。

「畜生、もう一度あれをやれだって、おい！ビオーヴェどうなってるんだ」と、雨雄がビオーヴェに突っかかっていった。

「ちょっとお待ちを」と言っ、ビオーヴェはリギユンと交信した。しばらくして、

「リギユンの緊急自己診断で分かったのですが、設計値では2ヶ所充電すれば十分なのですが、30年も放っておいたので手動式緊急発電装置のバッテリーが劣化していて、十分な電力が得られなかったそうです」

この船には上部面、下床部面に合わせて大小十ヶ所のレバーがついていて、整備されている状態だと2ヶ所で十分なのだが、長年野ざらしにされていたのでバッテリーが、かなりのダメージを受けていて、充電量も不十分になってしまつらしいとビオーヴェは説明し、今度は3ヶ所充電してくださいと続けた。

「3ヶ所かよ、まったく手間が掛かるな、仕方ないもう一度やって見るか」と、雨雄は仕方なくさっきのレバーの所に行き、レバーを引き、骨董屋のオヤジもまたレバーを引いていたが、今回、ウエスダーはビオーヴェのそばでその様子を見ていた。

3カ所目のレバーを引こうと雨雄は右後方、骨董屋のオヤジは左後方に行ったが、雨雄の行った右後方部は、損傷を受けていてハッチを開く事が出来ず、仕方なく左後方にいる骨董屋のオヤジの所に行った。

その傷は雨雄がこの船を手に入れる事によって出来る傷なのだが、まだこの時点で知る由も無かった。

雨雄も骨董屋のオヤジも、すでに汗を体中から吹き出していたが、まだ雨雄のほうが若くて体力があると言う事で、骨董屋のオヤジが引こうとするところを、

雨雄が「オヤジ俺がやるよ」と言つて、代わろうとするとオヤジが、

「まだこの船は俺のもんだからな」と言つて、引きかけたが手を止め、

「だが歳には勝てん」と言つて、その汗まみれでふらふらになつ

た体を雨雄と交代するため脇によけた。

三ヶ所目の充電も終り、再び警告のアナウンスが流れ、イグニッションモーターが回り始めた。

今度はイグニッションモーターも順調に回転を上げていき、機体上部から号砲の様な「ドーン」と言うような感じの、自家発電用ジェットエンジンの始動音が聞こえてきて、ついに「キーン」とタービンジェットエンジン独特の音が聞こえ、充電器が回り始めた。

ここからはもう人の手による操作は必要なく、しばらくすると機体の前後左右の航行識別灯がいきなりパツと点灯した。

第3章 母 その2（後書き）

リギユンはハッチを閉じたまま、内部の起動ができない場合の、用意が出来てたんですね

第3章 母 その3

ドタツ、ゴンと続けざまに人の倒れる音と、頭を壁にぶつかる鈍い音がした。

珍しく酒も飲まず、朝から一緒に食事をしていた晴雄は、慌てて椅子から立ち上がり、壁に頭をぶつけ倒れこんだ妻、美奈代のもとに駆け寄った。

今朝は晴雄とウエスダーが出かけて2人だけで食事を取っていた。

美奈代が食事中調味料をとってくると言って、立ち上がりキッチンの方に行きかけた時、テーブルの足にちよつと自分の足をかけてしまい、転んでしまったのだった。

もしウエスダーがこの様子を見ていたら、きっと晴雄が美奈代を突き飛ばしたものとみて、状況も聞かず激しく晴雄を叱責していただろう、しかし幸いにも二人だけだったのでその体を引き裂かんばかりの叱責の嵐は、今日は無かった。

「おい、美奈代大丈夫か」と晴雄が引き起こすと、

もうろうつとした意識の中で美奈代は、「あら、あなた、美奈代って誰の事、あなたは浮気でもしているのかしら？私はルインダよ…」と言って、気を失ってしまった。

晴雄は一瞬頭の中が混乱した、教えた事もまた二人の間で話題にした事も無いのに、何故美奈代は前妻の名前を知っているのだろうか。

だがそれは一瞬の事で、酒を飲んでいない今日の晴雄は、その後の判断を間違わず、みると美奈代のけがは大した事が無い様に見えるた。

しかし、今は美奈代を病院まで連れて行って手当てを受けさせなければいけないと思い、家庭のコンピューターに救急隊員の出勤を要請する様命じた。

病院に着き晴雄はカジャドにいる雨雄たちと連絡を取り、それほどたいした事は無いと思うが、できれば帰ってくるよう伝えた。

そのとき雨雄と一緒に画面に映っていたウエスダーが、一瞬画面に映っている晴雄の顔を見て、少し驚き、戸惑いながら晴雄に、あなたが居るのに何て事になるのよ、とののしった後、当然帰るわよと、言った。

そのとき、いつも飲んだっくれている晴雄にしては珍しく、しらふの顔で別人のような顔をしていた。しかしウエスダーが驚いたのは飲んでいない事ではなく、ある人物、それはウエスダーの実の父親に顔がそっくりだったことに、今、自分が気が付いた事に驚いたのだ。

ウエスダーの実父は母と40ちかく年が違っていた。

ウエスダーが生まれたときすでに父は60を越していて、父が歳を取ってからの子であつた為、えらくかわいがられて居た。

そんなかわいがってくれていた父と、この忌まわしい同居人とがそっくりだった事が分かり、その事に今まで気がつかなかった事に

も、ひどく動揺したのだった。

連絡を取り終った後、しばらくすると晴雄のもとにドクターが来た。

「先ほど、奥さんの出身地ペリタン星の病院から、奥さんの病歴を問い合わせしました」

「家内の様態は、過去の病歴を調べなければいけないほど、そんなに重いのですか」と晴雄は驚き聞き返した。単純に転んだ際に頭を打って、脳震盪ぐらいに思っていた晴雄は、少し不安を覚え、倒れた際の美奈代の言葉を思い出していた。

「いえ、ただ、ちょっと気になる事があったので調べて見ました。

しかし今は今回の事故とは別のことでお話があります」と、そのドクターはこのことについて、言って良いものかどうか迷っている風なので、

「何を聞いても驚きません、おしゃって下さい」

「先ほど奥様は意識を取り戻されたのですが、ご自分の名前は美奈代ではなく、ルインダだとおしゃってます。

そして歳は20才なのにこの40年の生活も覚えがある、とおっしゃっています。今かなり、ご自分でも混乱されています」

ドクターの話は続き、ペリタンの病院での記録によると美奈代はASGUによる激しい攻撃のさなか、民間機から負傷者が居るので転送しますと言う連絡後、緊急転送されてきた患者で、すでに意識

はなく非常に危険な状態であつたらしい事。

その後からだの方は奇跡的にも回復はしたものの、記憶の方はまったくなくなっていた事、更に悪い事に緊急転送してきた民間機の消息がその後つかめず、身元の確認が出来ないままになってしまったという事が分かったのである。

晴雄にとって皆今はじめて聞かされる事ばかりであつた。

そして更にドクターから驚くべき事実を晴雄はそのとき聞いたのだ。

それは、この病院に過去残っていた昔の晴雄の妻であるルインダのDNAのデータと、美奈代のDNAデータが、今回倒れた要因になった部分以外全て一致したと言うことだった。

そしてドクターは最後に言った言葉は、

「美奈代さんと、ルインダさんはどう見ても同一人物と言わざるをえませんね」と言う思わぬ言葉だった。

第4章 浮上 その1

「リギユン開けておくれ」と、再びビオーヴェが言った。

リギユンは「その要求は今受け付けられません」と、先ほどの金属音めいた音声ではなく、角の取れたやわらかい女性の声で応答があった。

これは先ほどの起動コンピューターから変わった、メインコンピュータの声であった。

そしてその言葉どおりハッチは開かれなかった。

「どうしてハッチが開かないんだ」と、雨雄が今にも食い付きそうな顔で、ビオーヴェに噛み付いた。

「分かりません」とビオーヴェが答えると、もう我慢ならんと言う顔になり暴れ始めた。

暴れるといっても船の廻りには当る様な恰好な物がなく、せいぜい腕を振り回す位であった。ウエスターもそれを見て、雨雄の気持ちがかかるので、何も言わずダダっ子がダダをこねているのを、笑って見ている寛容な親のように笑って見ていた。

骨董屋のオヤジも大きく左右に腕を広げて上げて、首を左右に軽く振り事務所のほうに向きを変え歩き出した。

そして「ヤレヤレ、やっとここからこいつが居なくなってくれるかと思っただけだな。

今度はエンジンがかかったままここに居座るのか」と、ぼやいて

いた。

まだ雨雄が悪態を吐いているその最中、ビオーヴェはしばらく黙っていた。

リンクの回復したリギンと通信をしていたのだ、それはほんの数秒間だった。

そしてビオーヴェが「今、リギンと…」と、言いかけたその時、雨雄が「畜生なんだって開かないんだ、このポンコツやろう、早くここを開けやがれ」と、言い、ハッチの近くをゴンと、ゲンコツで殴ったその時、

「プシュ」と、音がしてハッチが静かに開き始めた。

一番驚いたのは雨雄だった、「開けやがれ」と叫んだとたん、ハッチが突然開いたものだから「オッ」と言って2、3歩後ずさりし、思わずファイティングポーズを取ったほどだった。

あとからウエスターに「やるかこの野郎！」と言わなかっただけましねと、からかわれるほど動揺しているのが、他の者が見ても分かるほどだった。

ハッチが開ききり、ビオーヴェはさっさとリギンの中に乗り込んでいったが、雨雄は物珍しそうにきょろきょろと見回しながら、ビオーヴェに

「このハッチは何だってこんなにでかいんだ、人が乗るだけだったらこれの半分で十分だろ」と言った。

「この船はもともと密輸品を運ぶ貨物船として作られたんです。そのため大きな物も簡単に積み込む事が出来るようにと、このようにハッチが広く作られています」と、ビオーヴェが答えた。

「ところでハッチが開く前に、『今リギンが・・・』と言いかけたよな。何が言いたかったんだ？」と、再びビオーヴェに聞くと、

「先ほどリギンがあなたを、正式な私の主人と認めた事をお伝えする所でした」と言い、事の仔細を説明した。

まずビオーヴェが雨雄の所に行くまでの経緯はともかくも、今現在、正規の手続きによって雨雄の持ち物である事をリギンに伝えた事、そのうえで、この船のキーである私の正式な主人である、雨雄がこの船を操作できるという権利が許可された事を伝えた。

「なつ、なんだって、もう少し分かりやすく説明しろよ、正式な主人だとか、権利がどうか、もっと分かりやすく説明しろよ」と、雨雄が困惑したような顔でビオーヴェのほうを見た。

「簡単に言うと、私の主人である坊ちゃんが、この船を動かす事が出来ますよ。と、言う事です」とビオーヴェがさらりと簡単に説明した。

「ですから、坊ちゃんが『開ける』って、おっしゃったので、リギンがその声に反応してハッチが開いたと言う訳です」と、続けた。

「なんだそいう事だったのか」と、納得してポツリと雨雄がつぶやいた。

第4章 浮上 その2

ビオーヴェと、事務所のほうに帰りかけていた骨董屋のオヤジも含め、3人がリギユンの中に入り、それぞれ見て回った。

リギユンに入って最初に口を開いたのは、骨董屋のオヤジでビオーヴェに、

「お前さんさっきこの船の型式をH729、1型といったな、しかしこの船の現在の登録型式はH729、Rj1型だぜ、Rjが無ければ小型恒星間戦闘船だったが、今は型式にRが付いて時空航行船になってるな。

しかもjが付いてるって事は、高速航行が可能な銀河タイプで、この今我々がいる銀河ぐらいの大きさだと、数分で横断できる速さを持つてるって事だ」と、言いビオーヴェのほうを見て、なぜ型式が違うのか説明を求めるような目をした。

「リギユンのデータベースにアクセスした所、私と別れた300年前は確かに普通の恒星間貨物船でしたが、およそ200年前にタイムマシンを恒星間宇宙船に乗せる実験の為に、このリギユンが使われたようです。

その時にこの銀河を自由に行き来できるように、船の航行速度も上げられた様です」と、みんな船の中を歩きながら、ビオーヴェの説明を聞いていた。

みんなが船内のカーゴスペースであろう所に入って、また骨董屋のオヤジが、そこに据え付けられている機械を見て、「こりゃほんと

に年代もんだ」と、感心した。

そこにはRタイプのタイムマシンが据え付けられていた。

雨雄が、「よし！これで過去の地球にいけるぞ」と、言うと、骨董屋のオヤジが、

「ほう、地球か！しかしここ300年くらいの地球に行っても、何も代わり映えしないだろうな」と言うと、雨雄は

「そんな最近じゃないよ、俺が行きたいのはおよそ1200年前の古代の地球だよ」と答えると、骨董屋のオヤジが困惑したような呆れる様な顔をして、

「そりゃあこのマシンじゃ無理だ！俺の知っている限りこの手のマシンはせいぜい300年くらいが限度だ、1200年も行っちゃうと、10年や20年の誤差が出ちゃうぞ、止めとけ止めとけ」と言って手を顔の前で左右に振った。

そこへビオーヴェが話に割り込んできた。

「お話中すみませんが、リギユンから現在この船の所有はどうなっているのか、聞いて来ていますが」と、雨雄、骨董屋のオヤジと双方の顔を見た。

「俺はこの船はもう譲ってもらう事に決めたが」と、雨雄が言うと、骨董屋のオヤジは、

「そうだな、俺も異存は無いし、ここに置いておかれても、他の者が動かす事ができないんじゃないか」と、雨雄の顔を顎で軽くしゃくりながら言った。

「それでは決まりましたね、それでは坊ちやまにリギユンから話
しがあるそうです」

「雨雄様、とお呼びしたのでよろしいでしょうか？」と、先ほど
船外で聞いた角の取れた柔らかい女性の声が聞こえてきた。

その声は、「この船の所有者には、特別にリギユンのコンピュー
ターと、所有者の脳を直接リンクできます。」と一言のことを伝えて
きて、「貴方はどうしますか？」と質問してきた。

「それをするとうなるんだ？」と、雨雄が逆に質問したが、リギ
ユンは

「簡単に説明すると、私が貴方の体の一部になるのだという事
で、詳しくは体験されるのが一番かと思います。リンクを後で外す
には簡単に出来ます。私を手足のように扱おうと思われるのなら、
ぜひお勧めします」

「それで、リンクするのは面倒な手間がかかるのか？」と、更に
雨雄が質問すると、

「いえ、簡単な施術で終わります。10分もかかりません」

「よし、それではよろうか」

「それでは、医療室の方においでください」と、リギユンが言っ
たので、雨雄はそれに従い医療室を探しながら目指した。

医療室にはベッドがあり、そこに横たわれと言われ横たわると、

リギンが再度、「よろしいですか？」と、確認してきたので、雨雄は、

「1つだけ聞いておきたいんだが、前のこの船の持ち主、晴雄はリンクしていたのか？」と、聞くと、

「はい、短期間ではありましたがしていました、しかし、この船を手放す時外しました」と、リギンが答えると、

「外す事も出来るのか、それじゃあ早くやって貰おうか」と、体をベッドの上に横たえた。

10分にも満たないうちに、その手術は終わり、雨雄はベッドから立ち上がったが、立ち上がった瞬間、クラッとしてベッドに手を付けて支えた。

雨雄には今、自分の体がどうなっているのか分からなくなっていた。それは感覚的なものの情報が今までの数倍に増え、それが慣れない脳に入って来たものだから、脳の中で混乱が生じ、めまいに似た症状がでたのだ。

それを見ていたウエスターが、手を貸そうと歩み寄ったが、それを雨雄は手を軽く上げ制し、

「大丈夫、ちよつとめまいがしたただけだから…」と、言ってベッドから手を離し今度はちゃんと立ち上がって言った。

「これは凄いな！この船の中といわず、外までこの船のセンサーが届く所まで手に取る様に、みんな分かるぞ」と、言うと、ウエスターが

「でもまさか、私の下着までは分からないでしょう?」と、言う
と、雨雄がつかさず、「ピンク!」と、言ったとたん、ウエスダー
のびんたが、雨雄の頬を打っていた。

第4章 浮上 その3

「こりゃあ飛び立つ前にちよつと直しておく方が良いな」と、赤く手形がついた頬をさすりながら早速先ほど埋め込まれたインカムを利用して、リギユンのコンピューターと通信しながら雨雄が言った。

すでに骨董屋のオヤジは船外に出て自分の事務所に帰っていて、雨雄たちだけがコックピットに移動していた。

「それじゃ私はもう友達のところに行くからね」と、ウエスターがリギユンの出口に向かって歩きながらそう言うのと、

「義姉さん、クラスミさん所へ行くのか？」雨雄が聞くと、「そうよ」と、ウエスター振り向かずが答えたが、

「俺も行こうかな、久しぶりにあそこのおばさんにも会いたいしなあ」と、言うとうエスターは、

「あーちゃんは、ここに居てこの船直すんでしょ、それに会いたいのはおばさんじゃなく、恵子ちゃんでしょ」と、微笑みながらいたずらっぽい目で雨雄の方を振り返った。

織田家とクラスミ家は元々、雨雄の実母ルインダの知り合いであったのだが、寄寓にもウエスターの母、美奈代とも以前の住まいペリタン星からの付き合いであった。

またクラスミ家は。晴雄とルインダのキューピットの役を担った家族でもあった。

恵子と雨雄は同じ年で恵子には兄と姉がいて、今回ウエスターが会いにきたのは姉の方であった。

兄の方とは会えばすぐ口喧嘩になるのだが、本人たちは双方を毛嫌いしている様に見えるが、周りから見れば単なる痴話喧嘩に見えるような喧嘩ばかりだった。

事実、兄の奨一はウエスターが気にかかる存在であり、ウエスターはそんな気持ちが分かり、少々戸惑いつつも、つつい言い争いになってしまふのだ。

「ん、修理箇所も後部の破損箇所だけで、別に俺がいなくても大丈夫だろう」と、言ってビオーヴェのほうを見て、

「明日の朝までに、お前と修復ロボットで何とかしておいてくれ」と、言うどビオーヴェもいつもの事なので、

「はいはい、分かりました、そう来るだろうと思ってましたよ、どうぞ坊ちゃんはどこへなりとも行って、ごゆっくりお休みください」と、ふてくされた口調でそう言うど、コンソールの端に固定されていた修復ロボットと共に、外に出て修理に取り掛かった。

雨雄とウエスターは二人でクラスミ家を訪問した。ドアを開けるとおばさんが雨雄を見て、

「まあ、雨雄ちゃん？大きくなってえ」と、言っただがすぐに、

「もう30になるのに大きいは無かったわね」と、アハハハと大きな声で笑い出した。

「さあさあ、お入んなさい。雨雄ちゃんとは久しぶりね、義母さんは元気？」と、ここまで人に話しをさせない勢いでまくしたてた。

ようやく雨雄が「元気にやっていますよ」と、言っのが精一杯だった。

その夜は、クラスミ家の5人と雨雄、ウエスダーとで総勢7人で食事をし、雨雄にとってもウエスダーにとっても家庭を感じる夜を久々に過ごした。

翌朝早く晴雄からの連絡があるまで、二人は幸せな気分でいられたのだが、晴雄の美奈代が病院に担ぎ込まれたと言う連絡を受けてからは、雨雄もそうだがウエスダーは特に何か思いつめたように黙りこくってしまった。

早々にクラスミ家を後にして、ウエスダーは自分の船で、そして雨雄は骨董屋に行き、オヤジに別れを告げ、船に乗り込んだ。

全て、ゆうべの間にビオーヴェが整備していたので、すぐにハッチを閉めコックピットのコントロールシートに座り浮上準備にかかった。

「考えるだけで良いんですよ」と、ビオーヴェに言われるのだが、ついつい手が出そうになるのを押え、浮上できるよう目を閉じ考えると、身体がふわりと浮く感じがした。

そして頭の中にはまるで自分が空を飛んでいるかのように、回りの景色が手に取るように分かった。

外で見送っていた骨董屋のオヤジはふわりと浮き、次の瞬間リギンを姿を消した様に見えた。

そしてその居た虚空の空間を見つめてポツリと、「行ってしまった

か、居なくなるとやはり寂しいもんだな」と、そうつぶき事務所のほうに帰っていった。

リギンでは雨雄が今までに無い操縦の感覚に、有頂天になっていた、消えたように見えたリギンは、目にも止まらない程の速さで上昇していたのだ。

骨董屋のオヤジが、ガジャドの空を見上げていたら、赤い筋を残して上昇していったリギンの航跡が目にとまっていただろう。

それほどのスピードで飛行しても、他の航空機や船とぶつからないのは、リギンの優れたセンサーと、そのデータを瞬時に雨雄の脳に送っていたからだ。

送られてくるデータは雨雄の脳の中で三次元映像イメージとなり、そのイメージの中で船を思い浮かべ進めると、そのとおりにリギンが反応するのであった。

第4章 浮上 その3（後書き）

せめて、リギユンみたいな車があれば、世の中かなり事故も減るんじゃないかな

第5章 銀河艦隊 その1（前書き）

ここでの銀河とは、我が銀河、天の川銀河のことです。

第5章 銀河艦隊 その1

「艦長！識別不明小型船が、この領域にワープ航法で進行中です。」
と、索敵担当士官が報告してきた。

USGがアンドロメダ星雲銀河に遠征攻撃に出る為に訓練中である艦隊旗艦のブリッジは、その報告で緊張感が高まった。

艦長はすぐさま、その小型船に関する詳しい報告をするよう求めた、暫くすると先の士官が、「小型船は、数分で通常航行に入るもようです。」と、報告してきた。

「よし、各艦船に連絡！各艦船は準戦闘態勢をとり、タイムドロップ及びサイレントモードで姿を隠す様に指示を出し、当艦は今の状態のまま戦闘態勢のまま待機し、小型船が通常航行に入ったと同時に船影を前方大型モニターに投影しろ！」と、艦長はブリッジで通信士官および、当艦の戦闘指揮士官に命じた。

「今日は早く家に帰ったほうがよろしいのでは…」と、ビオーヴェがたしなめたが、雨雄は一向に気にする様子もなく、船を先日时空局の船を振り切った領域に向けて進んでいた。

「坊ちゃん、今あそこにはUSGの艦隊が居て、軍事訓練中でしょうか？」と、ビオーヴェが再びたしなめる様な事を言ったが、

「ああ、なんかそんな事を誰か言っていたな、それがどうかしたか？」と、雨雄はそんな事は臆せず、めんどくさそうに答えた。

「まもなく通常航行に移ります」と、リギユンの音声が出てき

た。

「まあいいじゃないか、ちょっとこの船がどの位の物か見てみたんだよ」と、雨雄がビオーヴェに言うと、ビオーヴェは呆れて、

「なにも今でなくてもいいと思うのですがね」と、言ったところで、リギユンが通常航行に入った。

通常航行に入った所に、リギユンの進路を塞ぐように、一隻の戦艦が待受けていた。

「こちらはUSG艦隊旗艦『ザイエルフィ』である。貴船は訓練星域に侵入している。船名、所属および目的を明らかにせよ！」とその戦艦から通信でいきなり誰何された。

「おいおい、いきなり誰かってか」と、雨雄がだるそうにそう言ううとビオーヴェが、

「坊ちゃん、ここは素直にご返事なされた方がよろしいのではないかと、私は思います。USG戦艦を敵にまわしては、とても勝ち目なんかありませんよ」

「だがなあ、お前も知つてのとおり俺は人から、ああしろ、こうしろと、言われるのは嫌いだよな」と、なおも雨雄が艦船に対し、返答を渋っていると、

「警告！前方の船が武器を準備して、こちらをロックしています」と、リギユンの声が通常の音声より高めの声で響いた。

「ふん、そう来るか！」と、雨雄がなおも通信を渋っていると、

「警告！宇宙魚雷が発射されました。当船着弾まで5秒！回避行動を取りますか？」と、リギユンが聞いてきた。

「左に30度転進！」と雨雄が言い終ったところで、宇宙魚雷が飛んできて、リギユンの右横で宇宙魚雷が炸裂した。

「坊ちゃんのがのんびりなさっているから、威嚇攻撃されたじゃないですか」と、ビオーヴェがのんびり言ったが、雨雄は何か考えているのか、黙ってリギユンのコンピューターとコンタクトを取っているようで、コンピューター中のデータを調べていた。

第5章 銀河艦隊 その2

「よし！これで行こう」と、雨雄がぼつりと言うと、リギユンがその場から消え次の瞬間武器を装填し終った状態で、ザイエルフィのブリッジの真ん前に現れた。

ロックもすっかりとブリッジに合されていた。

ザイエルフィのブリッジにいた乗組員は皆驚いて、少々パニック状態になっていた。

そこに今回の作戦立案し、指揮も直接取る為に乗艦していたシドフィル中將がブリッジに現れた。

「艦長！やけに騒がしいが、何事かね？」と、艦長に質問し、同時に前方の大型モニターを見て、

「なんと……」と、言ったまま暫く言葉を探すのに発する言葉が無いように、ただ口をもごもごと動かして、言葉にならないうめき声のような声を出していた。

「タイムドロップで敵船の後ろに回り、魚雷をロックし次第発射しろ」と、艦長は提督の質問には答えず、部下に命令していた。

航行士はすぐさまタイムドロップし、時間をすべりその間に空間を移動し、リギユンの後ろに付け、リギユンに照準を合わせようとした瞬間、リギユンが今居た位置から消え、まるでのろまなザイエルフィをあざ笑うかのように、そのブリッジの前に現れ、今度はごく弱いレーザービームをブリッジに向け発射した。

リギンの中では雨雄が、「USGの奴ら今ごろ、青くなってるぜ。きつとな!」と、大きな口をあけてげらげら笑いながら、さも楽しそうに外の様子をモニターで見ていた。

再び、ザイエルファイが動いたが、向こうの動きは、リギンと雨雄の脳と同期されている今の雨雄にとって、それこそろまな亀だった。

再びリギンがザイエルファイのブリッジの前に現れ、さすがにザイエルファイの艦長も危機感を感じたのか、ドロップアウトしていた全艦にリギンに対し攻撃をするよう指示した。

「坊ちゃん大変です!銀河級戦艦がリギンを全方向から取り囲んで、こちらに照準を合わせています」

「それがどうかしたのか」と、雨雄は何でそんな事を気にしているのか、とでも言いたげにビオーヴェに聞き返した。

「ですが坊ちゃん!50隻以上の大艦隊ですよ。これだけの艦船を敵に回して無事でいられるはずが無いでしょう」

「さあな、それはどうかな」と言つて、雨雄が神経を集中すると、リギンがザイエルファイの前から消え、一隻の艦船の前に現れ、外部をモニターするセンサーに向つてごく弱いレーザー照射を行いブリッジの中からビューワでモニターできないようにした。

1隻の艦船にそれを行うと、次々に艦隊の艦船の前に現れてはセンサーを破壊していった。

ザイエルフィのブリッジには次々と攻撃された事を伝えてくる通信でパニックになっていた。

ザイエルフィの艦長は、顔が赤くなったり青くなったりしながら何やらわめいていた。

「もういいだろう。艦長リギユンに対して降伏する事を伝えなさい」と、それまで黙って成り行きを見ていたシドフィル中将がザイエルフィ艦長にそう命じた。

「なんですと！」と、艦長はそれこそこれ以上赤くはならないだろう位の赤い顔をして、提督の方を見ると、提督は今までの成り行きを楽しんでいたかの様に、顔を和ませ真直ぐにビューワに映る、リギユンの動きを追っていた。

「投降して、彼を…、雨雄さんをこの船に招待してくれ」と、提督はそう言って、自分の部屋に引き上げて行こうとしたが、ブリッジを出る際、

「こちらに来られたら、作戦室にお通しして私に連絡をくれるかな」と、艦長に言ってブリッジから出て行った。

突然艦隊より投降すると言われ、さらにこちらに招待したいのでザイエルフィまでご足労願いたいとの申し出に、雨雄は少し戸惑いはした。

しかし、さすがの銀河艦隊の艦船であろうとも、雨雄とリギユンのリンクは切れないだろうと思った。

もしも身柄を拘束されるような状況になっても、今の雨雄とリギ

ユンの実力からすれば艦隊から雨雄を自由にする事は簡単に出来そうなので、雨雄は申し出を受けザイエルフィに向かう事にした。

第5章 銀河艦隊 その3

織田雨雄さん、お久しぶりで…」と、シドフィル提督が作戦室に入ってきて、挨拶をしかけが最後まで挨拶を言い切ることが出来ず、啞然と雨雄の顔をまじまじと見つめたまま、そこに立ち尽くしてしまった。

シドフィル提督にとって、そこに立っている雨雄は30年前に会った当時のままで、年を取らず若いままであったのだ。

シドフィル提督の知っている雨雄は、60歳になっていなければ成らないはずだったのだ。

提督は気を取り直し、椅子に腰掛け、「織田雨雄さん？ですよね？」と、雨雄にそう問いかけた。

「そうだけど、俺はあんたを全然見覚えが無いんだけどね、そもそも艦隊に関わる事なんか無いもんでね」と、雨雄は「お前こいつ知ってるか？」と、ビオーヴェに向ってそう問いかけた。

「この方は、銀河艦隊提督シドフィル中将で、31年と4ヶ月と12日前銀河艦隊アカデミーを卒業し、30年前にペリタン星に於いて、ASGUの敵艦隊と激しい…」と、ここまで言いかけたビオーヴェに、雨雄は右手を上げ、

「もういいよ」と、うんざりした顔で雨雄はビオーヴェを制し、「俺の言ってるのは、そう言うデータでは無くてだなあ、俺たちが、個人的に知ってるかって事だよ。要はこの人と俺は友達かって事だ」

「それは、まったく無いですね」と、あっさりとビオーヴェは否定し、それ以後沈黙した。

それまで、二人のやり取りを聞いていた提督が、「貴方はペリタン星には行かれた事はありませんか」と、落ち着いた口調で雨雄に問い掛けた。

「無いなあ」と、ビオーヴェに「そうだろう」と、同意を求め、今度は提督にの方を向き、「それが何か重要な意味でもあるのかよ」と、そう聞き返した。

「先ほど、ビオーヴェが言いかけてましたが、私にとって最初の実戦がペリタン星でした。

あの戦闘はUSG艦隊にとっては、分水嶺のような戦いでした。

当時、ペリタン星は銀河系第3宇宙域の宇宙艦隊工廠があり、エネルギーも豊富な星で艦隊のエネルギー補給基地でもあったので、USGにとっては要衝であり戦略的に死守しなければならなかったのです。」

「ふーん、そうなんだ」と、興味なさげに雨雄は聞いていたが、提督はそれに構わず、

「あの戦闘はし烈な戦闘で、ASGU艦隊もここを落とせば、この銀河の進行が楽になる事を知っていて総力を挙げていたようです。

われわれは圧倒的な戦力の前にUSG艦隊はじりじりと押されていて、ペリタン星自体にも被害が出始めたその時、一つの小さなガンシップが現れました。

当初USG艦隊は押されていて混乱し、その船の存在さえ気が付きませんでした。驚く事にその船は、次々とASGU艦隊の艦船を撃破して行き、12時間後には300席近くいたと思われるASGU艦隊の80パーセント以上を撃沈し、ASGU艦隊を撤退させました」

「ふーん、なんか歴史の授業を受けてるみたいだ」と、まったく興味を示さない雨雄を無視し、さらに提督はこう続けた。

「その小さなガンシップの名前は、USG艦隊の歴史に正式には記されていませんが、『リギユン』と言いました。そしてその船長は『織田雨雄』と名乗り、お供に金色のロボットを連れていたのです」

ここまでできてやっと雨雄が「なに！」と、言う顔をして提督の方を真直ぐ向き、聞き耳を立てるようになった。

「その時雨雄さんの、お世話をしたのが当時、中尉になったばかりの私でした。お世話をしているうちに雨雄さんから、タイムドロップ戦法のヒントをもらい、実際にペリタン星の戦闘で敵を撃破したのはこの戦法だったんだよと、教えてくれました」と、ここで一度大きなため息を付き、こう続けた。

「しかし、雨雄さんは詳しい方法は教えてくれませんでした。これはまだ君には教えてはいけない事だ、しかし40年後ここで待っていれば、その時君に合い詳しく知る事になるから楽しみにしているよ、とこう言い残し何処か去って行ったのです」と、そう言う今回度は黙って雨雄を真っ直ぐに見て、黙ったまま雨雄の返事を待った。

しかし雨雄は「俺は あんたをまったく知らないしなあ、」と、戸惑いながらそう答えるのが精一杯だった。

「私は、この日の為に色々と研究してきてみましたが、しかし先ほど貴方が見せた戦法程完全に船が動きません。」

出来れば先程の詳しい戦法をお教え願えれば、これからAUGUに向うわが艦隊にとって、非常に大きな戦闘能力のアップにつながりますので、約束通り是非ご伝授願います」と、こう言って提督は頭を深々と下げた。

そこで先程の戦法をどういう風にしたらか、提督にありのままを話すと、「それではどのようなリンクを張っているか、少し調べさせてもらっても良いでしょうか」と、提督が申し出てきた。

雨雄は他人に自分の体を調べられるのは性に合わない性質だが、普通なら拿捕され監禁されても文句の言えない事をしでかしていたので、しぶしぶ同意した。

「雨雄さん、大変参考になりました、これで完璧な操船が出来るようになるでしょう」と、提督は別れ際感謝を込めてそういった。

第6章 映像記録 その1

イコムス星に帰るリギユンの中で、「俺は結構、いい奴だったんだな」と、コックピットで操縦席にふんぞり返るように足をコントロールパネルの上に投げ出し座りながら、雨雄はそうつぶやいた。

「そうですね、まあ周りに迷惑を掛けなければ、私としては構いませんがね」と、ビオーヴェはポツリと言った。

「しかし俺はいつペリタン星に行つて、あんなことをしたのかな」と、又雨雄がつぶやくと、

「これから行く事になるのかもしれないね」と、ビオーヴェが又誰に言うでもなくそう言った。

そんな気分を良くしていた中、ふと晴雄の事務所からもって帰ったディスクの事を思い出した。

そして、ディスクの中に出てきたあの二人の顔を思い出したとたん、突然リギユンから大量のデータが雨雄の頭にドツと送られてきた。

それは、織田あつし、織田美奈代夫妻の写った、ビデオデータだった。

「なつ、なつ、なんだ!!」雨雄の脳が一度にデータを送られパニックに陥った。

その映像データは、雨雄が家で父の晴雄から無断で拝借してきたディスクの入っていた物と、比べ物にならないほど大量で、ディスク

の中に入っていた全ての内容であった。

その内容は、最初にこれは未来の私たちの子孫へのメッセージとして残します。子孫の中に青いあざのあるものは20世紀に来るのは十分注意してください。

良からぬことが起こるでしょう、と言う出だしでそれはこれから私たちが体験した事を説明します、と言う事だった。

そして体験した事を話し始めた。自分たちは事故にあって、治療中に見た夢だとお互いが思っていたけれど、二人が結婚し暮らし始めてからのある夜の二人のふとした会話から解った事だった。

「俺さ、二人がドイツで再会した時、孝一や圭子ちゃんたちと4人で散歩していて、事故に遭っただろう？」と、あつしが話すと、

「うん、私はあの時もうだめだと思ったわ。だってあの車絶対自分たちにぶつかると思ったんですもの」と、美奈代も答えた。

「あの時、二人ともどこにも怪我がなく不思議だったけど、もっと不思議に思ったのは、病院で目覚めるまで変な夢を見たことなんだ」と、ここまで話した時美奈代も自分も不思議な夢を見ていたと言った。

その後二人がそれぞれその内容を話していくと、覚えている細部の事まで同じだと分かった。

ただ二人は今まであまりにも話が突拍子もないことで、二人とも他人に話したことは無く、徐々に記憶が薄れてきていたので、二人で話し合い記録に残そうと言うことになった、と言う出だしだった。

二人は、自分たちは自動車に引かれそうになったと思った瞬間、ある宇宙船の中にいて、その乗員は腕に青い蝶のあざがあり、「私は、あなたの方の子孫です」と、名乗ったそうだ。

それから、二人を未来の世界に連れて行き、そこで民間の宇宙船が他の銀河の戦闘艦に襲われている現場に遭遇したたという事。

その宇宙船から女性を救い出したまでは良かったけれど、退避しようとした際事故に遭い、これまた宇宙戦闘中のペリタン星と言う星に飛ばされ事。

その星で救助した女性を、病院に降ろしたけれど、その後行方が分からなかった事など、あまり詳しくはないけれど触れてもいた。

又あつしは、友人の孝一と体験した不思議な話もしていた。

この話も孝一が宇宙船らしき物を見ていて、危うく二人でビルの屋上から落ちそうになった時のことだった。

二人の体がビルから完全に乗り出し、後は落ちるだけの状態から急に二人の体がふわりと持ち上げられ、気が付くとビルの屋上に二人が降ろされていた。

二人の動向をビルの下や、屋上から見ていた他の人たちの記憶がまったく二人が何をしていたか、どんなことが起きたのかまるっきり覚えていなかった、と言う話だった。

そして再び最後に「腕にあざのある青年が、わが子孫に生まれたなら気をつけなさい」と、締めくくられていた。

そんなビデオを雨雄は見ていた。

いや正確に言えばデータが直接脳に送り込まれたわけだが、なぜそのデータがリギユンに残されていたのか、いや先祖であろうその夫婦がなぜこのようなビデオを残すことになったのか。その事を無性に知りたくなった。

雨雄は元来、思いつくとそれが自分にとって不利益なことでない限り、やって見たい性分だった。

もともとこのビデオの一部を見て過去に行き、この夫婦を探すことをすでに決めていた雨雄は、母の事は気にはなかったが、今からすぐに過去に行こうと決めたのだった。

第6章 映像記録 その2

「よし、行くぞ！」と、誰に言うでもなく言ったが、それを聞いていたビオーヴェは、

「行くのでは無く、帰るんでしょう」と、聞きなおした。

「うん。帰るとも言うな」なるほどなと、一人納得してうなずいてはいたが、ビオーヴェが言う、帰る場所と、雨雄の思っている場所時間はまったく違うところであった。

当然ビオーヴェの帰るとは現在のイコムス星であり、今入院中である雨雄の義母のところであった。

「よし、じゃあ時間航行の準備をしよう」と、雨雄が言うと、ビオーヴェはその表情のない顔を雨雄に向け「え！」と、言う感じで雨雄を見た。

「年月日を設定してください。年号は銀河暦でも、地球暦でも構いません。」と、柔らかいトーンの女性の声でリギンが応答してきた。

「ほう、銀河暦は何となく分かるが、何で地球暦でもいいんだ？」と、雨雄が疑問を口にする。

「地球人がオーナーだった頃が長く続きました。その結果地球暦をプログラムした方が良くということになりました」と、リギンが説明した。

「ほう、それは俺にとって都合のいいことだな」と、雨雄は一人

うなずき満足していた。

「よし！、それでは地球暦2000年1月1日あたりに行ってみようか」

「時間をさかのぼる場合、200年以内であれば0・1パーセント以内で目標時刻に到着できますが、それ以上さかのぼる場合百年に付き1パーセントづつ誤差が大きくなっていきますが、よろしいでしょうか」と、リギユンが時間誤差について尋ねてきた。

「ちよつと待てよ。今地球暦で言うとは何年になるんだ？」と、雨雄がたずねると、

「はい、3201年になります」と、リギユンが答えた。

「そうするとだ、ざっと1200年さかのぼる訳だから、誤差はおおよそ20年にもなる訳だな」

「その様になります」と、リギユンはあっさり肯定した。

「ところで、例のビデオデータだが作成年月日は分かるか？」

「はい、分かります。地球暦2012年7月29日になっています」

「そうか、それなら誤差の範囲内って事だな」と、質問とも独り言ともいえないような感じで、ポツリと雨雄が言ったが、「そういうことになりますね」と、横からビオーヴェが口を出してきた。

それをお前には聞いていないよと、言いたげに雨雄がビオーヴェ

の方を見ながら、こう言った。

「よし、それじゃあ。たいした問題じゃあないな。地球の2000年に向けて出発しよう」と、出発の命令をしたが、リギンからは「問題があります」と、返ってきた。

「なんだ？」と、いかにも不満そうに雨雄が聞くとリギンは、

「地球暦2000年前後のこの宇宙域は混沌としていて、騒乱の絶えない地域でした。

このまま時間航行をした場合、戦闘の真つ最中に遭遇する場合があります」と、警告してきた。

「なるほど、そういう危険もあるわけか」と、納得したが、「それじゃあどこがいい？」と、尋ねると、

「2000年前後の地球近くの宇宙域ですと、比較的安定しています」と、リギンではなく、ビオーヴェが答えた。

「なんでそんな事を知ってるんだ？」と、雨雄が尋ねると、ちょっと言いにくそうにビオーヴェが、

「その頃私とリギンはあるご主人に仕えていまして、地球の近辺で宇宙海賊のようなものをしておりました。

あまり技術の発達した星はありませんし、当時この銀河では地球の周辺の方が偏狭の地でした。

むしろ今で言う第3宙域の方が文明が発達していて、その文明に

よる遊びの犠牲になったのがイコムス星でした」

「ほう、そうだったのか、あまり歴史に興味が無かったもんでな、俺は知らなかったな」と、雨雄が言い、こう続けた。

「そんな事よりどうすれば安全な航行になるのか、どちらか教えてくれないか」と、ビオーヴェともリギユンなのかも分からないように問いかけた。

そうするとリギユンが、「それですと、現在の時間で地球の近くまで行き、そこで時間航行するのが向こうに到着した際、宇宙船などが少ないのでよろしいかと思います」と、提案してきた。

「そうか、じゃあ早速ワーム航法で第一宙域に向け出発してくれ」と、雨雄が言うのと、リギユンはワーム航法に移る準備を始め、まもなく地球に向け出発した。

宇宙の亀裂を利用するこの航法は、航行中亀裂の変化により船体の破損、と言う危険が無いとはいえないが、最近の研究も進みほとんどその危険性も無くなっていた。

銀河の端から端までわずかのエネルギーで数分の内に、移動できるように今は出きるようになってる。

数分の後リギユンは地球の周回軌道、それも月と同じ高度上で周回を始めていた。

「よし、今度こそタイムトラベルだ!」と、張り切って雨雄が言うのと、リギユンもそれに答え、時間航行に早速入った。

コックピットの椅子に座り前面にあるモニターで外を見ていた雨雄の目に入って来たものは、何もなくまばゆいばかりの光だけだった。

「まもなく目的時間に到着します。タイムワープ終了します。到着地点の安全は完全に保障されておりません。タイムワープ終了後すぐ動ける態勢をとって置いてください」と、リギンが警告を出した。

まもなくタイムワープを抜けたリギンだったが、そこは穏やかな宇宙空間で、先ほど未来にいた月軌道上で周回していた。

第6章 映像記録 その3

「さて、今は何年だ」と、雨雄がリギユンに聞くと、

「ただいまの年は、地球の西暦で言いますと、1995年6月29日になります」と、リギユンが答えた。

「こんな惑星から40万キロも離れていては、地表の様子が分かりにくいな、もう少し高度を下げようじゃないか。そうだな人工衛星の静止軌道あたりまで下げてみようか」と、雨雄が言くと、リギユンは月の軌道から離れ、静止衛星軌道まで降りていった。

「地球の人口は今何人ぐらいだ」と、言くと「約50億人です」と、答えが返ってきた。

「50億か！さてさて、その中からどうやってご先祖様を探し出したいもんかな」と、思索していると、リギユンから、

「DNAをスキャンしてみても如何でしょうか」と、リギユンが提案してきたが、「50億人も居るんだぜ、全部調べてたら何年もかかっちゃうぜ」と、雨雄が頭を振りながら言った。

「女性のみのミトコンドリアと言う、人間の細胞内にあるDNAを比較するようにすれば、スキャンするのは約25億人で済みます」と、さも簡単そうに言っただけだ。

「まだまだ、多いな半分になっただけだし、もっと特定できないもんかな」と言うと、今まで黙って聞いていたビオーヴェが、

「坊ちゃま、私の話を聞いて下さいますか。私はもともと翻訳ロボットとして作られ・・・」と、ここまで話すと雨雄は、

「今、お前の事を聞いている訳でもなく、お前がどんな機能を持っているかを聞いているんじゃない、どうすれば効率よくご先祖様を探せるか聞いているんだ」と、少々「むっ！」したような顔でビオーヴェの方をにらんだ。

「どのあたりの地域に住んでるかぐらいでも特定できれば、もっと絞り込めるんだがなあ、何かいい特定方法は無いもんな」

「そう言えば、ビデオデータの中の言葉なんかはこの言葉だったのかな。リギン分かるか」と、聞くと横からビオーヴェが、「日本と言う国の言葉です」と、即座に答えた。

「お前！何で分かってんのなら、何で早く言わないんだ」と、雨雄がまたしてもしかめっ面をして言うつと、

「先ほど私が言おうとしたのに、お止めになられたでしょう」と、少々甲高い声で答えると、雨雄が、

「私は翻訳ロボットだからどうたらこうたら言わずにだな、用件だけ言やあいだろう、！」と、今度は八つ当たりのようにビオーヴェの方を向き言った。

「あのお、もう少し詳しく言ってもよろしいでしょうか」と、雨雄の顔をうかがうかのように続けた。

「なんだっ！」と、さもあつかましそくに、雨雄が言うつと、

「この頃の地球の言語は・・・」と、言いかけると、雨雄が「うちくはいい！要点だけ言え！」と、イライラしながら言った。

「では結論から言いますと、その方言は特徴から日本の中部地方で新潟県という地方になります」と、今度は簡潔にビオーヴェが答えた。

「よしよし、それでいいんだよ。で、そこにはどのくらいの人間が住んでるんだ」と言っていると、今度はリギンが「およそ240万人です」と、答えた。

「よしそれでは、リギン。その中の女性だけスキャンしてみてください」と、雨雄が言っていると、リギンはおおよそ120万人のスキャンを始めた。

第6章 映像記録 その4

程なくしてリギユンからの報告があり、ミトコンドリアのDNA一致該当者は約1万人いて、その1万人に対し全てのDNAスキャンをかけると数百人に絞られた。

「その数百人の中で、美奈代という人物を探せば言い訳か」と、雨雄が納得顔でうなずき

「よし、リギユン地球のコンピュータに侵入できるか」と、雨雄が言ったがりギユンからは、「どのコンピュータに侵入すればよいのでしょうか」と、聞いてきた。

「どこのって、どこでも入ればどこでも繋がるだろう」と、雨雄が不思議そうに聞きなおしたが、

「この当時のコンピュータネットワークは、この惑星ではローカルなネットワークしか確立されておりません。一台に入り込んで狭い範囲しか分かりません」と、リギユンが答えた。

「その新潟県とか言う所には無いのか」と、聞くと「県のコンピューターと今対話中です。暫くお待ちください」とリギユンが答えた。

暫く待つと「該当者ありませんでした。ただ、美奈代と言うお名前の方は居られ、さらに先ほどのスキャンからもれていた方を見つけました」と、リギユンが答えた。

「その地域に内にいないって事だろ、その人は今どこに居るんだ」と、不満そうに雨雄が言うと言うと、横からビオーヴェが「一つ一

つの地域をスキャンすればどうでしょうか」と、口を出してきた。

雨雄は「仕方が無いな、そうするか」と、言い「人口の一番多いのはどこだ」と、言うとりギユンは「東京都と言うところですよ」と答えた。

先ほどのデータと合うDNAのスキャンを始めると、あっさり一人の少女が見つかった。

早速雨雄はその少女を見ようと、地表に降り立った。

地表に降り立つと、そこは『雨』と言うイコムス星では天候がコントロールされていて、夜しか降らない物が、雨雄が降りて暫くすると、しとしとと、降ってきた。

橋のたもとのランカンで座っていると、自転車で二人乗りをしてやってきた若い男女が、そこに向かってきた。

前に乗りハンドルを持ち、一生懸命こいでいる青年が、この雨の中ずぶぬれになっている雨雄の方をけげんそうにちらりと見たが、特に何も声も掛ける事もせず通り過ぎていった。

通り過ぎる刹那、後ろに乗っている少女が歌を歌っているのがかすかに聞こえた。

それは雨雄にはまるで天使が歌う、やさしい子守唄のように聞こえた。

母の声を覚えている訳ではないが、雨雄には何処か懐かしいような母の歌声の様に聞こえたのだった。

二人が橋を通り過ぎた所で雨脚が烈しくなり、二人は雨宿り為、自転車から降り、近くの建物に入っていた。

前に乗っていた少年が建物に入る為、ドアを開けた時、「後ろに乗っていた方が美奈代さんです」と、脳に埋め込まれたインターコムで、リギユンが知らせてきた。

第7章 追憶 その1

「かたん」

靴が床を打つ小さな音が、静かな待合室にわりと大きく響いた。

晴雄は美奈代を病院に連れてきて、検査が終わるのを待合室で待っている間に居眠りをしてしまっていたようで、椅子に座って頬づえをついて居眠りしていた。

しかし、その腕が外れた拍子に組んでいた足もはずれ、床に打ち付けられ音がしたのだ。

晴雄は寝ていて音が大きく聞こえたので、「はっ」と、して目が覚めた。

寝ている間、この30年間寝ると必ず見る夢をこの短い居眠りの間でも見ていた。

それは、生まれたばかりの息子と、その母であり晴雄の妻であるルインダが、恒星間貨客輸送船でペリタン星からイコムス星への帰路に襲われ、ルインダが行方不明になった事件の夢だった。

晴雄はルインダが行方不明とわかったその日から、自分がルインダの事を気に掛けていたら、あんなにはならなかっただろうという自責があった。

その所為で、あの時の事をほとんど毎夜夢に見るようになった。その夢を見るのを嫌い事件後は寝る事が苦痛になっていた。

幾度か寝ずに朝まで起きていたりしたが、人間である限り寝なければ体が持つはずが無く、仕方なく疲れて眠りつくと再びその夢を見る状態だった。

そして最後にたどり着いたのが飲酒による眠りであった。

酒を飲んで寝ると確かに夢を見る回数が減ったのでさらに毎日飲んで寝るようになり、しまいには朝から飲むようになっていた。

事件のあった日、晴雄は、宇宙船の中古市場から小型船「リギユン」を見つけ、その船の乗り心地を試そうと、銀河の外延まで行って、乗り心地を楽しんでいた。

「リギユン」は手に入れたばかりで、リンク用のインターコムはまだ晴雄の頭には埋め込まれていなかった。

それでもマニュアルでコンソールから簡単に操作でき、また対話式のコンピューターが会話でもサポートしてくれるので、その操縦は非常に軽快なものだった。

そのうち晴雄はその操縦に夢中になり、その日に妻たちがイコムス星に帰って来るのをすっかり忘れてしまっていて、気が付くと外延を周って、第4宇宙域の近くまで来ていた。

第4宇宙域との境にリギユンが入ると気が付いた時に、時空局から緊急メッセージが入った。

それは「ASGUの戦艦にルインダさんの乗っているアコーニイ号が襲われている」と、言う知らせだった。

晴雄は急遽進路をその襲われている星域に向け取った。

リギユンの航行能力からすればたとえ銀河の端から端まででも短時間で行けるのだが、初めて乗る船で最速スピードを出すにはどうすればいいか判らず、通常のワープで向かう事にした。

ワープから抜けた時、正面から小型の宇宙船が向かってきて、避けようと左に進路を変えたが左の船腹に相手の船が接触した。

しかし、相手の船はそのままワープをしてしまったようで、姿が見えなくなった。

リギユンがワープを抜けた時、悪い事にASGUの戦艦はその小型の宇宙船を追っていた様で、晴雄のリギユンはその戦艦と、合い対峙する恰好になった。

すでにASGUの戦艦は戦闘準備は出来ていて、いきなりリギユンに発砲してきたが、晴雄は何とか切り抜け、貨客船の方向に飛んでいた。

ASGUの戦艦はすぐさま方向転換してきて、再びリギユンに向かって撃つて来たが、そのエネルギー砲はアコーニイ号の後部に当たった。

アコーニイ号の乗員、乗客はすでに船から非常用脱出シャトルでアコーニイ号の周囲に散らばっていてアコーニイ号に当たっても被害は船だけになりそうなので、晴雄も少々心が痛んだが「まあいいか」位に思っていた。

だが、その気持ちはリギユンの「船に生存者あり」と、言う報告によって一瞬にして消え去り、「これは自分が何とかしなければいけない」と、思った。

リギユンに「こちらにその生存者を転送できるか」と、聞くと、
「はい、ロックオンしていますからいつでも出来ます」と、返事が返ってきた。

晴雄はすぐさま「転送しろ」と、リギユンに命じ、船を転送し易い様にアコーニイ号に近づけた。

最接近した時、再びA S G Uの戦艦からエネルギー砲が発射されたが、リギユンは間一髪避ける事ができ転送もうまく行った。

しかし、その流れ弾がまともにアコーニイ号に当たり、そして二発目の被弾でアコーニイ号は大破した。

第7章 追憶 その2

ASGUの戦艦は小型船がうるちよろとするので、少々苛立って来たのか、めったやたら撃ってき始めた。

しかし、それが彼らにとって致命的な失敗をもたらした。

晴雄がうるちよろと逃げ回っていたのは晴雄自信たえワープで逃げて、多分追いつかれるのではないかと思っていた。

そして確信は無かったが、銀河艦隊がこの事態を知り、こちらに向かっているだろうから、到着まで何とか逃げ切っていようと決めていた。

果たして晴雄の思惑が当たり、程なく第8銀河艦隊が到着し、ASGUの戦艦はそれまで小型船相手に優位だったのが一瞬にして立場が逆転した。

第8艦隊は降伏勧告をしたがASGUの戦艦は勧告を聞かず、第8艦隊に向かっていたのだが、勝負はなくあっけなくASGU戦艦の撃沈と、言う恰好で終わった。

晴雄が現地に到着した時、すでにアコーニイ号の乗員や乗客は非常脱出しており、ルインダの消息はUSGの艦隊が来て本格的な救助活動が始まるまで判らなかった。

第8艦隊は、後から来た第7、第9艦隊と共に第3宇宙域の艦隊で、貨客船の周囲に散らばっている脱出用シャトルに居る生存者の救助を始めた。

晴雄は勝敗が付き落ち付いた所で船を止め、治療室に救助した生存者を見舞った。

それは幼いほんの生まれたばかりの男の子だった。その子を見て晴雄は驚いた。

てつきりルインダと一緒に居るものと思っていた我が子、雨雄だったからだ。

雨雄は見つかったが、晴雄はその事で余計ルインダの事が心配になっっていた。

雨雄は晴雄が到着した時には、貨客船内に一人でいたと思われた。しかしセンサーで人体反応を見た時、アコーニイ号はすでに人間の反応は無かったからだ。

幼い雨雄を置いてルインダが一人脱出するはずもなく、またそんな妻であるはずも無い。

雨雄一人居たという事は、ひょっとしてルインダに、何か重大な事態になっているのではないかと、不吉な思いが胸をよぎっていた。

案の定いくら待っても、艦隊の方からはルインダに関して何も報告は無かった。

晴雄は当時まだ、時空局の監視室の監視員であった為、時空局の勤務もあり後ろ髪を引かれる思いで、その場を離れイコムス星に向かった。

イコムス星に着いてからも、USGの方からはルインダの消息は知らされなかった。

雨雄はUSGに対し、もし仮にあの場所でルインダが貨客船の爆発に巻き込まれたのなら、せめてルインダの遺体の一部なりとも捜してほしいと、懇願した。

USGも、もう一名行方不明者がいたため、晴雄の要請に応じてその事件の空域をくまなくスキャンしてみたものの、ASGU戦艦の乗員であろうと見られる反応は見られたが、ルインダやもう一名の行方不明者の、DNAの痕跡すら見つけることが出来なかった。

時間がたち、日が経つにつれ晴雄は、自分があの時にリギュンに夢中にならず、慣らしの飛行も程ほどに帰ってきていれば、ひよつとしてルインダも見つけられたのではないかと、自責の念がましてきていたのであった。

そしてついには毎夜寝ると悪夢のごとく、あの時の事を夢に見るようになった。

晴雄は軽く頭を振り、意識をはつきりさせようと、立ち上がり待合室の窓に向かい、そのうす赤いイコムス星の空を見上げ、美奈代もまたルインダの時のように手遅れになってしまっのだろうか、そうならないで欲しいと願った。

美奈代には結婚当初より迷惑ばかり掛けていて、あまり大事にした覚えが無いのであった。

それなのに美奈代は愚痴の一つもこぼさず、晴雄によくついて来

てくれていた。

今になって、ルインダの事に30年も引きずられ、幼い雨雄を見
てくれ、晴雄に尽くしてくれた美奈代がいとおしくなった。

そして今回も遅かったのかと、後悔が湧き上がりそうになる晴雄
であった。

第7章 追憶 その3

ここにもう一人、過去に思いを馳せる女性が居た。

今朝、義父の通信を受けた時、あまりにも生みの親と晴雄の顔が似ているので、ルインダは父「あつし」と最後にあつた日の事を思い出していた。

あの日、家族で始めてペリタン星を出て、イコムス星へ旅行に出発する予定だった。

シャトルの出発ベイで、お父さんが母美奈代は抱擁しているのを、ルインダは二人の下から見上げていた。

「俺はガジャド星に用があるから、先に出発するよ。美奈代は後からルインダとイコムス星に来てくれ」と、美奈代にそう言っていた。

その後、まだ7歳のルインダを抱き上げ「またすぐ会えるからね、先に行ってるからね」と、ほっぺにキスしてまたやさしく降ろしてくれた。

そして、二人に「それじゃ」と、軽く手を上げくりと向こうに向きシャトルに向かうバスに乗り込んでいった。

ルインダは父が向こうを向く刹那、なぜか寂しそうですまなそうな顔を、自分に向けたような気がしたのを憶えていた。

その顔はすぐ子供っぽく、7歳のルインダでさえ思わず「いい

のよ、許してあげるよ」と、言いたくなる様な顔だった。

それまで、父は年を取って生まれたルインダを目に入れても痛くないと、言う位可愛がっていた。

この旅行は、家族が始めてペリタン星を出る旅行だった。

父は時々、ガジャド星へは一人で出かけていた。

それはガジャド星に住んでいる、クラスミ家に行く為だった。

クラスミ家の人達は、よく仕事などでペリタン星に来ていて、我が家にもよく家族で立ち寄っていた。

ルインダは、その家族の奨一とはよくケンカもしたし、またある時は二人で仲良く遊んだりもしていた。

出発ベいで父を先に送り、ルインダと母は父とは別の旅客船に乗り、イコムス星に向かう為に、別のシャトルに乗り込み旅客船に向かった。

ルインダ達は無事イコムス星まで着いたが、イコムス星で父が来るのを待っていたが、いくら待っても来なかった。

父の到着予定から1日たち、父の行方不明の知らせを持って、顔を青くしたクラスミのおばさんがイコムス星までやって来たのは、もう夜の帳が降りる頃だった。

ルインダの生活はその瞬間からガラリと変わってしまい、半年も経たない内に母はクラスミのおばさんの薦めもあり、今の晴雄と結

婚したのだ。

晴雄は奥さんを亡くしたばかりだと言っていた。そして晴雄には生まれて間もない雨雄と言う男の子がいた。

晴雄は酒びたりの毎日だが、仕事だけはまじめにこなしていた。

そんな晴雄に母はなぜかいやそうな素振りを見せず、おとなしく夫婦になった。

ルインダも今思えば自分でも不思議なのだが、徹底的に晴雄を嫌う事は無かったし、生まれて間もない雨雄がとても可愛く思い、本当の弟の様に思った。

そんな生活が30年も続いたのだが、今朝の晴雄の顔を見てそれまで記憶の深くにあった、父「あつし」の顔とダブっていたのだ。

ルインダは軽く頭を振り「そんな事、ありえない」と、ポツリと声に出し、否定した。

第8章 奇病 その1

美奈代が倒れ、急ぎガジヤドにいた雨雄たちに連絡した時、今までのウエスターなら晴雄の顔を見た途端、

いつも母親を大事にしないだらしの無い酔っ払いの義父に、傍にいながらにして不可抗力とは言いながらも、怪我をさせたのだから当然、非難罵倒の言葉の嵐がウエスターの気が済むまで、曝されていたろう。

しかし、今日は少しウエスターの様子が違っていた。

ウエスターは朝の知らせの時に晴雄の顔を見た時以来、ずっと何かを、思い出そうとするかのように、晴雄を責める事も忘れていた。病室で寝さされている母、美奈代の顔をちょっと見ただけで、美奈代の容態を気にしながらも、時々晴雄の顔を横目でチラチラと見ていた。

その日、晴雄はこの30年絶やした事が無い飲酒の習慣もせず、珍しくシラフだった。

今朝は起掛けに一度は酒を飲もうと、酒瓶に手をやりコップに注ごうとしたが、何か不思議な感覚に襲われた。

人は時として虫が知らせる、と、言うものがあるそうで、この時、晴雄が感じたのはそれだったのではないだろうか。

とにかく、30年間欠かした事がない飲酒の習慣をしなかったの

である。

そのおかげで、いつもたるんでいた顔や、うつろな目が完全に影をひそめ、もとの端整な顔立ちであった晴雄の顔が精悍な顔になっていた。

だが、晴雄にとっては何時も娘から、小言を言われ慣れているということもあり、かえってウエスターから何の叱責の言葉が無い事の方が、気味が悪くヒヤヒヤしていた。

そこにその場の気まずいフィンキから引き離してくれるかのように、時空管理局から春雄に緊急連絡があった。

春雄は「ちよつとすまん。事務所に連絡してくる」と、言ってせかせかと行動して、いそいそしたそぶりを見せない様、病室をいったん出て行った。

程なく病室に帰ってきたが、春雄は何かしら腑に落ちないなど、言う顔をして帰ってきたのだった。

ウエスターが、病室に到着して1時間くらいたった頃、美奈代の長年の主治医である、担当のドクターというのが現れ、何かしら言いにくそうに、こう切り出した。

「私は長い間、美奈代さんの主治医を勤めてきましたが…」と、言いかけ、ちよつと後の言葉を言いにくそうに、言葉を切った。

「はい、そうですね、このイコムス星に、母が来てからずっとドクターに診て貰っていますね。それが何か」と、ウエスターも何か重大な発表でもあるのだろうか、顔をちよつと曇らせながら、そ

う答えた。

その時、音もなく「スツ」っと、ドアが開き、先ほどまで過去に行っていた事など、微塵も感じさせような、雨雄がやっと病室に到着したのだ。

第8章 奇病 その2

病室に入ってきて、何かもの言いた気に、雨雄も春雄の顔をチラチラと見ていた。

病室に入ってきた雨雄の方をドクターはちらりと見たが、特に雨雄の方を見る事もなく重そうに言葉を続けた。

「美奈代さんの病気にに関して、現在も色々調べていますが、今分かっている事はDNAの塩基配列の崩壊による、多臓器の機能不全だと思われます。」

しかし現在の医学をもつてしても、崩壊そのものを止める手立てはありません」そこで一息入れ、こう続けた。

「この星に來られた時の、DNAには特に以上はありませんでしたが、今はまだはつきりした事は言えませんが、どうもこちらに來られた時のDNAには、すでに今の崩壊の兆候が現れていた様に思われます」

「それがなぜ今になって…、あつ、いや、なぜ、その時あなた方は気がつかなかったのですか？」と、ウエスターが聞くと、

「当時私が美奈代さんのDNA検体を得る為に、美奈代さんの血液からサンプルを取り調べましたが、その時の崩壊は私の所見では長い宇宙旅行をしてきて、その間の宇宙中子線による、塩基配列のちよつとした配列崩壊だろうと判断しました。」

特に生活に異常をきたすほど、深刻なものではないだろうと思っ

ていました。事実、この30年近く美奈代さんのDNAは、つい1月前の検査でもイコムス星に來られた当時と、ほとんど変わりありませんでした」と、ドクターが言ったところで、ウエスダーが

「治療は、今のところ無いの？」と、聞いた。

「残念ながら、今の所、原因が分からないので、残念ながら打つ手は何もありません。まずは原因究明からはじめないと・・・」と、ドクターは首を横に振りながら言葉を途中で濁しながら、両腕を広げて見せた。

「ただ、今判っているのは、これは病気ではないだろう。と、言う事が判りかけています。」

何か爆弾の光線の被爆か、又はDNAを破壊することを目的とされた光線に浴びたのか、分子レベルでのチェックで判りかけてきます。」

「そこまで判っているのなら、その逆の治療をすりゃあ良いじゃないか」と、ここまで黙って聞いていた雨雄が口を挟んだ。

「その光線、電磁波の一種でしょうが、それがどんな物かわからないし、その効果の逆の治療法が見つかるか、まだ未知数なのです」と、ドクターは雨雄の言葉を一蹴した。

「私としても、全力を尽くしますが、今の段階で私としては美奈代さんを、冷凍カプセルに入れ、完全に生体機能を止め、現在のDNA崩壊を、現在の時点でストップさせて置きたいと思っています。」

そこで晴雄さんの同意をいただきたいのですが、いかがでしょう

か」と、続けた。

「今は、そんな事しか出来ないのか…」と、晴雄は絶句した。

ウエスダーも「ほかに良い手は無いの？」と、ドクターに詰めよ寄ったが、「残念ながらありません」と、ドクターはまたしても、首を横に振りながら言った。

「それで、どの位眠っていたら良いのでしょうか、美奈代は…」と、晴雄が聞くと、ドクターは、「今の所、まったく見当が付きません」と、ドクター自身も自分のふがいなさに、悔しそうに言った。

結局、晴雄は、美奈代を冷凍カプセルに入れる事にしぶしぶ同意した。

ドクターは「全力を尽くし、一刻も早く治療法を見つける努力をします」と、言って、美奈代を病室からカプセルに入れる準備をする為、病室を出て行こうとしたが、

「おっと、もう一つ皆さんにお話があるのですが…」と、今度は困惑したような顔をして「これは今ここで話して良いものかどうか、正直私は迷っています」と、ぼそぼそと話したくなさそうに、話し始めた。

「実は奥さんのDNAの事なのですが、…」と、そこで言葉を切ると、雨雄が「異常があるんだろ？それは今聞いたばかりだぜ」と、ちよつと茶化したが、ドクターはあまり茶化されたことを気にせずこう続けた。

「そのお、奥さんのDNAと一緒になんですよ」と、ドクターは言

つ
た。

第8章 奇病 その3

今度はそこにいた晴雄やウエスターも何言っているのだろうと、いつせいにドクターのほうを見た。

「何寝ぼけたこと言っただよ、本人のDNAが本人のDNAと一緒になんて当然じゃないか、なにせ本人のDNAだものな」と、雨雄も訳の判らない事を口走った。

「ああ、すみません私もちょっと信じられなくて、頭が混乱しています、ちよっと言葉が足りませんでした。

ただ今、過去の似たような症例を検索するため、無作為にコンピューターにあるDNAのデータと照合しています、まずはこの星の方々から検索していたのです。

すると奥様と、なくなられた、たしかルインダさんておっしゃいましたかね、前の奥様の名前？」と、言っただけ晴雄の方を見ると、「ああ、そうだ、ルインダだ」と、晴雄がかぶりを振りうなずいた。

「そのルインダさんと、美奈代さんとのDNAがまったく、いっても現在異常な部分は除いてですが、すべて一致すると言った結果が出たのです」と、ドクターが言った。

「そんなばかな」と、雨雄が言い、「母さんは30年前俺が生まれてすぐ、ASGUの汚い民間船に対する奇襲攻撃の為に死んだはずだ」と、続けた。

「正確には、行方不明者の一人だ、だが宇宙空間で行方不明とは、

それはすなわち死んだと言う事を意味しているのだがな」と、晴雄が当時の事を想い出だしたのか、肩を小刻みに震わせ、涙声になってそう言った。

「そうでしたよね、あのアコーニイ号事件で奥さんは行方不明になられたはずで、生存はあの状況で絶望視されていますよね」と、ドクターが言った時、船の名前が出たところでウエスターが「え！」と、という顔をした。

ウエスターは今まで晴雄の前妻、つまり雨雄の実母であるルインダが事故で亡くなった事を聞いていたが、その時の詳しい話を聞いた事が無く、アコーニイ号と関わっていた事を知らなかった。

ウエスターは驚いた。それは晴雄も当時は有名になった、この事件に関わっていたと言う事についてだった。

ウエスターもこの事件に関して、二名の行方不明者が居ることを知ってはいたが、実の父であるあつしが先にガジャドに行くといつてアコーニイ号に乗り込み、あつしもまた行方不明になっていたからだ。

ウエスターにとって、とても忘れられない船の名前が思わぬところから出てきたのも驚きだった。

ウエスターは今朝の春雄の顔を見てから、なぜか妙な胸騒ぎがするのを覚えていた。

それは悪い知らせの時の胸騒ぎではなく、何か重大な事が起こりそうな、または何か大変な事が分かりそうな、そんな予感みたいな

胸騒ぎであつた。

美奈代が倒れその事に対してももちろん不安ではあるが、それとは別な何か良い事が起こるんじゃないのかと、希望を持てるようなほんの些細な胸騒ぎといいたら良いだろうか。

ただそれが自分では事態をコントロールできない、大きな流れのように感じていた。

その胸騒ぎがこの事だったのか、ウエスダーは思ったが、この位の出来事では無い様に思えた。実際胸騒ぎが消えることは無かった。

そんなウエスダーや、ほかの者の考えなど気にもせずドクターは、

「まだコンピューターのデータエラーと、言うことも考えられるのですが、詳細は私も把握していません。今は症例の検索と言うことで、DNAそのものの検索や照合でも無いので、コンピューターも一致しましたと、言うことだけ報告してただけなのです」

ドクターはそれだけ言うと、首を横に振りながら病室を出て行くとしたが、雨雄が引きとめた。

「そのDNAのチェックは詳しくするのですか」と、聞くとドクターは、「メインの治療に関係ないので、今は特にしませんが、ご希望とあればしておきましょうか」と、三人の内のだれに聞くまでも無く聞いた。

「そうですね、出来ればチェックしておいて下さい」と、春雄が特に強調するでもなく弱々しい声でドクターに頼んだ。

「分かりました、チェックしておきましょう」と、短く答え、ドクターは小さく三人に会釈をし、病室を出て行った。

病室に残された三人は、それぞれがそれぞれに色々な事を考えていて、寝ている美奈代の傍らに、ただ黙ったまま立っていた。

第9章 過去 その1（前書き）

ジャンルをファンタジーからSFに移しました。

第9章 過去 その1

「どさ！」

雨雄が時空局の晴雄のオフィスにあるのソファに、体を投げ出すように座り込んだ。

ソファの前には小さなテーブルが置いてあり、対峙して向かい側にもソファがあるが、晴雄は部屋に入ってソファには座らず、自分の机の椅子に座った。

病院から帰り、いったんは家に三人で帰ったのだが、晴雄が雨雄に話がある、と言って時空局の晴雄の部屋に来るように言っておいたのだ。

座り込んだとたん雨雄は、晴雄が呼び出したにもかかわらず、こう切り出した。

「おやじ、何かおれに隠し事をしてないか、と言うより、俺に言わなきゃいけない事を、最初から無い事にしようとして、隠滅しようとしなかったか」と、問いただした。

「お前に隠すようなことなんて、これっぽっちもありやしないよ」と、小指の第一関節の所を親指の先で指し、雨雄の方に見せた。

「今度、古い宇宙船をガジャドで見つけたんだけどな。その船の名前をリギンと言うんだが、おやじその名前に覚えが有るだろう」と、雨雄がどうだと言わんばかりの顔で言つと、

「その事でお前をここに連れてきた」と、晴雄は何も堪えない様子だったので、雨雄は「おや」と思った。

「さつき病院でお前たちを待っている時にだな、時空局の方から連絡があつてな、お前がそのリギユンで過去に渡航したという連絡を受けた。

そこで渡航理由を聞く為に、お前をここに呼んだわけだがな」と、ここまで言つた所で晴雄は、一息付きさらにこう続けた。

「お前には常々、過去に行つてはいけなと厳しく言い渡してあるだろう。それを無視してお前はなぜ無許可で、しかも俺が絶対に許可しない200年を遥かに超える1200年近い遡行をしたのか！」と、

今日は朝から妻の美奈代の事もありしらふでいた晴雄が、最後の方は少々語気を荒げ、詰問した。

珍しい晴雄のいかっているのを見た雨雄は、多少気押されたが、今までにこういった場合でも雨雄はあまり気にする必要は無い、と言つ事を知つていて平然とこう聞き返した。

「待てよおやじ、俺の質問の答えを先に聞きたいもんだな。その答えによつて返答が変わるからな」と、雨雄は切り替えした。

「それはさつきも言つたとおり、お前に隠している事なんて何もない」と、言い切り、そして虚勢を張るかのように背筋を伸ばし、胸を張つた。

そこで、雨雄はポケットから先日晴雄が机の上に置き忘れ、雨雄

が勝手に持ち帰ったディスクのことを言い、

「じゃあ、あれの説明をしてもらおうじゃないか」と、ちょっと息巻いたが、晴雄は、平然と「何のことか」と、しらを切りとおした。

思わぬ晴雄の反応に雨雄は少々戸惑ったが、気を取り直し、「あまり驚かないようだな」と、聞きなおし、さらにこう続けた。

「それには、大した情報が入っていないと、安心してんだろう、けどなおやじ。俺はリギユンを手に入れてんだぜ、それがどう言う事が分かってるんだろうな」

「ああ、分かっているさ。過去に行ける様になったって事だろう。200年ほどだけな」と、晴雄は大した事じゃないさ、と言わんばかりに軽く言い返した。

「リギユンの前の所有者はおやじだったそうだな」

「そうだが、それがどうした」

「おやじはこのディスクのデータを、リギユンに移しただろう」

「いや、移した覚えは・・・」と、言いかけた時「はっ」としたような顔になり、「リギユンにこのデータが残っていたのか」と、小さな声で誰に言うでもなくてつぶやいた。

雨雄はそれを聞き逃さず、「ああ、そうだよ」

「あの時、データはほとんど壊れたと思っていたのに、俺はディスクを取り出す事の方ばかり気にしていて、あのデータをリギユン

が勝手に記録していたなど、思ってもいなかった」と、また独り言のようにつぶやいた。と、ここまできてふと我に返り、

「それでお前は全部見たのか」と、雨雄に尋ねた。

第9章 過去 その2

「そうだよ、だから20世紀の地球に行つて来たんじゃないか」と、右手を胸の前から体の前に差し出し、行つて来たのだと言うしぐさをした。

「そうだな、過去に無断で渡航した事は、病院でお前たちを待っている時、時空局の方から連絡を受けていた」と、呆れ顔で雨雄の顔を見た。

「そうさ、ちょっと行つて来てやったよ。これからもう一度行こうと思つてる」と、さらりと言った。

晴雄の顔が見る見る内に険しくなり、

「誰が行かすものか、これからリギンを時空局の管轄下に置き、お前には指一本触らせない」と、言つた時である。晴雄の机にある時空監視室直結のインターホンが、けたたましい警報とともに、監視室長の声が聞こえてきた。

「局長、大変です！ たつた今時空変動警報が鳴りました。レベルはレッドです！ 至急こちらにおいで下さい」と、わめき立てたが、直後監視質のざわめきが聞こえ、再びインターホンから室長が、

「そこでお持ち下さい、今、えっと、・・・」と、ちょっとしどろもどろになった。

「なんだ、どうした、何がどうなった」と、晴雄は椅子から立ち上がり監視室の方に行こうと机を回り、机の前から中腰の状態にな

ったままで、インターホンに向かい、室長の様子に異常を感じ、怒鳴り声を上げた。

暫くの間監視室の方で、場所はそれで良いのか、時間は、などという監視員と監視室長のやり取りが聞こえた後、

「局長。そこでいったい何があったのですか。異常を知らせる監視機は、時空間のゆがみがその部屋から発生していると知らせています。」

そこから発生した波動が20世紀の地球に影響し、さらに現在の銀河全体にも影響を及ぼしています」と、インターホンから室長が報告してきた。

「それは何時からだ、正確に言ってみろ」と、インターホンに晴雄がそう聞いた。

いや正確にはインターホンの向こうにいる室長に聞いたのだが、晴雄はインターホンを抱え込みしゃべっているの、まるでインターホンその物に問い掛けている様に見えたのだ。

「はい、ほんの数分前。突然です」と、言っと、先程の質問をもう一度聞いてきた。

「いったいその部屋で何が起きたのです」

「ふむ・・・」と、晴雄は考え込んだ。そして「まさかな・・・」と、つぶやくと雨雄の方を向いて、こう言った。

「時空局の正式の許可を与える。過去に行ってもいいぞ」と、言

って再びインターホンに向かって、

「どうだ、警報は消えたか」と、インターホンの向こうの室長に聞いた。

許可が出た雨雄は「ぼかん」と、した顔で晴雄とインターホンをかわるがわる見ていた。

インターホンからは、「はい！ たった今までこの銀河の過去が崩壊する程の警報が出ていましたのに、今は警報が出る前の穏やかな状態に戻りました。

一部を除きクリアされました。異常なしです」と、正常に戻った事を伝えてきて、インターホンは切れた。

第9章 過去 その3

晴雄は力を入れ、いかり肩のようになっていた肩の力を抜き、「ふう」と、ため息を付きながら、こう言った。

「どうやらお前が過去に行かなければ、この銀河の現在は成り立たないらしい。信じ難い事だがな」と、頭を抱え込むように椅子に座り、ひじを机の上に付いた。

「うん。まあそれはありがたい事だけど……。それよりさっき俺が聞いたことはどうなんだよ。

俺は許可があるうと無かろうと、過去の地球に行くつもりでいたからな、許可がどうのこうのという問題より、俺にとってあのリギユンで、おやじがディスクをどうしようとしたのか聞きたいな」と、

雨雄は許可の事などうれしくも無いといった風で晴雄に聞いた。

「そうだな、お前に過去に行く許可を与えた以上、伏せておく必要は無いな」と、ポツリと独り言のように言うと、「うん」そうだなと、一人うなずき納得し、そして今度はきつちりと雨雄の方に顔を向け、こう切り出した。

「あの日……。そう、お前がかあさんと一緒に輸送船アコーニイ号に乗っていてASGUの駆逐艦から攻撃を受けた日……。だな。

俺は手に入れたばかりのリギユンに夢中になり、銀河の縁を飛ばしていた。

そこにUSGからの連絡だと言って、時空局の副局長から連絡が入った。

それは輸送船アコーニー号が襲われていると言う事だった。

ちょうどその時、あのディスクをリギユンで見っていた所だったと、そこまでゆっくりと、思い出すように話した。

「それじゃあ、おやじはデータを全部見たのか」と、雨雄は思わず身を乗り出しそう聞いた。

「そうだな、青い蝶のあざの所まで見た。20世紀に來ると良くない事が起こる。と言うところまではな」

「だから俺を、タイムマシンから遠ざけていたんだな」と、雨雄は腕をたくし上げ、その腕にある青いあざを見た。

「今では、お前をタイムマシンから、遠ざける事も意味が無くなつたがな。」

そこまで見た所でアコーニー号の連絡が入った。

俺はすぐ見るのをやめてディスクを入れたまま、現場に向かった。

しかしワープを抜けた途端小型の宇宙船と接触し、そのショックでディスクを入れていたプレーヤーが傷み、ディスクが出なくなった。

無理に出した時にはディスクのデータも傷ついていた」と、そこまで言つて、「これが俺の知っているディスクの話だ」と、これ以

上は何も無い、と言った風に両腕を広げて見せた。

「なあおやじ。その、20世紀に來ると、云々の所だけどなあ、正確にはよからぬ事じゃないのか」

「えっ！」と言う顔で暫く晴雄は考えていたが、

「そうだったかも知れんな。だがいずれにせよ雨雄が行くと、よくない事が起こると言う事だろうが」と、晴雄が言くと、

「おやじは最後まで記録を見ていないのでそう思っているだろうがな、俺が過去に行かなきゃ、俺たちは存在しないらしい所があつてな、だから俺は無性に行きたくなつたし、行かなくちゃあと、使命感さえ持ち始めてるんだぜ」

「雨雄が使命感に燃えるか」と、少々苦笑いしながら「まあ、お前も一人前の感情と言うか、言葉を使えるようになったのか」と、こう続けた。

「なんとでも言いやがれ！とにかく、おやじや他の時空局の連中が止めようと俺は行くからな」と、捨て台詞をはいて、雨雄は部屋を出て行った。

残った晴雄はやれやれといった顔で、「無事に何事もなく帰ってくりゃ良いが・・・」と、呟いた。

第10章 事故 その1

坂の上から猛スピードで下りて来る車があった。

ゆるいカーブに差し掛かりその車はオーバースピードでカーブに入ってくる。

その坂道の歩道を孝一、圭子そして少し前をあつしと美奈代が歩いていた。

カーブにはいつてその車の後輪がキツキツとなり始め、次第に車の後部がスライドし始め、ついには車のコントロールできなくなつた。

ここは2006年06月24日、ドイツのミュンヘン市にある、ミュンヘン・オリンピアシュタディオンから下りて来る坂道である。

つい二時間前、スタジアムのメイングラウンドでは、ワールドカップの決勝トーナメントの1回戦があり、B組2位だった日本と、A組1位のヨーロッパの強豪国チームとの試合があった。

試合は0対0のまま、後半終了間際までどちらが勝つか分からないような試合だった。

しかし勝利の女神はロスタイムの2分間だけ、ほんの少し日本に微笑んでくれた。

それはあまりにもあっけなく、またゴールとしてはいわゆる泥臭いゴールだった。

日本選手のミッドフィールダーが放ったミドルシュートは、ゴールから20メートル地点からの当り損ねのシュートで弱々しく、相手のキーパーの前に居る敵選手のところにはふらふらと上がった。

それを相手のデフェンダーがヘッドでクリアしようとしたが、シュートそのものにスピードがなく、当然ヘッドでのクリアも弱々しいものになった。

ポロリと落ちるように転がったボールが、たまたま詰めていた日本選手の足に当たった。

しかも当たったボールは、ノーマークでゴールの前に居た、日本選手のフォワードの前に転がったのだ。

そのフォワードはそのボールを冷静に、そして確実にゴールに押し込んだのだった。

スタジアムは一瞬静まり返った。相手国のサポーターは信じられないと言った面持で、絶句し、また日本のサポーターは喜びのあまり、絶句した。

しかし、次の瞬間、激しいどよめきが日本のサポーターから沸きあがり、また相手国のサポーターからは、ため息ともつかないどよめきが起こった。

延長になれば押されていた日本には、ほとんど勝ち目が無いように思えていたので、日本にとってまさにロスタイムの幸運であった。

そんな日本人サポーターの興奮のさなかに四人は先程まで居たの

だった。

四人はドイツに居た圭子の所に、アメリカに居た孝一と美奈代、そして司法試験に無事受かり、弁護士として歩き始めたあつし達が集まったのである。

興奮を冷ましたから帰ろうと四人はスタジアムの周りを散策した後、そろそろ帰ろうかと言う事になり、スタジアムからミュヘン駅に行くバス停まで、緩やかな坂道を下っていたのである。

雨雄はこの時間に着き、あつしを東京で見つけた。

あつしは職を変える事もなく弁護士事務所に勤めていたので、簡単に見つける事が出来たが、いぜんとして美奈代の所在がまったく掴めなかったのである。

しかし映像のデータの中で、二人はドイツで再会すると言う事を言っていたし、時空管理局の監視室のパネルデータから、この時間に来れば二人に合えると思っていたのである。

その雨雄の思惑が見事に当たった訳だが、当の雨雄は何となく惘然としていた。

当然あるべき事が、そのまま目の前で起きるのが何となく面白くなかったのであるが、その雨雄の不満をひき飛ばしてくれそうな事が目の前で起こりつつあった。

雨雄はリギンから地表に降り、坂の途中で4人を窺がっていた。

雨雄にも坂の上からコントロールを失った車が、あつしたちの方

に突っ込んでいくのが見えていた。

雨雄は「まずい」と、思った。

その車が真直ぐあつしと美奈代の所に進んでいくのである。

誰がどう見ても二人はその車にはねられるとしか見えない状況だったのだが、雨雄は車が二人にぶつかる瞬間リギユンによってリギユン船内に転送してしまったのだ。

あつしたち二人は街灯のポールの所を歩いていて、車は「ガシャーン」と言う、大きな音を立て街灯のポールにぶつかり停止した。

そして、その様子を見ていた周りの人々は、ポールの横にちよつと跳ね飛ばされた二人を見た。

圭子は車がぶつかる瞬間、どう見てもあつしたちが跳ねられると直感したのか、思わず孝一の胸に顔を埋め、ぶつかる瞬間を見ようとしなかった。

だが孝一はぶつかると思った瞬間、いやぶつかった瞬間をしつかりと見ていた。

それは車が二人に接触する直前二人の姿が消え、次の瞬間ほんの数センチずれた所に二人が現れ、いかにも車にぶつかったように倒れこんだのだ。

それはほんの一瞬の出来事であったが、実はそこに現れたあつしや美奈代たちは、彼らの時間で二日の時間がたっていたのだった。

すぐに孝一は救急車を呼び、二人を病院まで運んだが、二人とも倒れた時の傷ぐらいで、たいした怪我は無かった。

第10章 事故 その2

雨雄はリギョンに転送して二人を助けたものの、リギョン船内に二人の後を追って帰ってきたのだが、これからどうすれば良い物が悩んでいた。

前回のビルの上での時は、あつしと孝一をビルの上に引っぱり上げ、それを見ていた人々を忘れさせる事で、リアルタイムに事を解決出来た。

しかし今回は、短い時間ではあるが二人を現実時間から消えさせ、すでに数分たっているのである。

あつしと美奈代はと言うと、今まで二人が歩いていたと思ったら突然奇妙な部屋に瞬間移動したので、何が起きたのか訳も分からず目をぱちくりしていた。

そこに雨雄が帰ってきた、その雨雄の顔を見てあつしは

「あつ、あんたはあの時、ビルの下でぶつかった人ですよね」と、あつしが雨雄に向かって聞いてきた。

「へえー、よく覚えていたなあー」と、雨雄は感心したがあつしは更にこう続けた。

「確かあなたに合うのは、これで三度目ですよね」

「えっ」と、雨雄はきょとした。暫く自分の記憶をたどる様に目が泳いだ。

「ああ、そうか、最初にあなた達を見た時、あなたが私の方を見ていましたね」と、雨雄には珍しい丁寧な言葉で言った。

二人の会話を、今だきょんとして聞いていた美奈代を見て、雨雄が気を利かせた。

「自己紹介しておきます。私は織田雨雄と言います。

今からおよそ1200年先で地球の西暦で言うところと3200年で良いのかな、この地球からおよそ10万光年離れたイコムス星と言う星から、あなた方に会うためにやって来ました」と、

雨雄は胸を張り、はつきりとした言葉でこう言った。

その言葉を聞いたあつしが、「あ、う、何かの冗談ですか」と、自信満々の雨雄に向かってあつしが、そのプライドを傷つけるかのような問いかけをした。

あつしは真剣にそう聞いたのだが、雨雄はまじめに自己紹介したのに、冗談かと言われ少し「むっ」と、した。

あまりにも話が現実とはかけ離れていて、まだ簡単に私は「宇宙人です」と、言ってくれた方が二人にとってまだ現実味があっただろう。

「なんだよ、信じないのかよ、それじゃあなた方が突然来た、この部屋はどこだと思ってるんだよ。

ここはタイムトラベル出来る宇宙船の中なんだぜ」と、

大きく腕を広げリギュンのコックピットを見てみると言わんばかりのしぐさをして見せた。

二人の反応は「・・・」であつた。

あつし達二人にとっては、あまりにも簡素に出来ているコックピットでは、未来的には思えなかったのだ。

それもそのはずで、進行方向には大きなメインモニターこそあるけれど、その前にはコンソールがあり、そのまた前にはシートはあるが、

コンソールにはタッチパネルの様なものがあるだけで、いわゆる縦桿みたいな物すらないのである。

しかし、そのモニターをちらりと見て、他に目を向けようとしたあつしの目がモニターの方に釘付けになった。

そのモニターに映し出されていたのは先程まで居た自分が歩いていた道路であつたが、そこにはもう一人の自分と美奈代が倒れていて、その脇に駆け寄ってくる孝一と圭子が映し出されていたのである。

そう、ここに居るはずの自分たちがそこに映し出されていたのである。

「そんな・・・」と、絶句したあつしを見て、美奈代もなんだろうとモニターの方を見た。

美奈代もその画面を見て「えっ！」と言って、口に手を当てて凝視してしまった。

第10章 事故 その2（後書き）

ん？幽体離脱？いやいやこの物語はあくまでもSFです。

第10章 事故 その3

モニターの中では、いや実際の地上では孝一が救急車を手配し、その救急車にあつしや美奈代が乗せられ、病院に向かうであろう様子が映し出されていた。

「おい、ビオーヴェお前何やらかしてんだよ」と、雨雄はビオーヴェがレプリケーターで、二人にそっくりのロボットでも作り、地上に降ろしたのかと思ったのだ。

「坊ちゃん、私は何もしませんよ」と、今まで部屋の隅で黙って三人の会話を聞いていたビオーヴェが部屋の中央の、三人の前まで進み出てきた。

そのビオーヴェの動きを見て、「おお!」と、あつしと美奈代が同時に声を上げた。

今では独立二本歩行できるロボットが開発され、社会に出ている。しかし、ビオーヴェほど人間らしく真直ぐ立ち、スムーズに歩くロボットはまだ無かったのだ。

しかもビオーヴェの体の表面は金色に輝いているので、これもまた二人の目を引いた。

二人はここに来て初めて今、自分たちが現実離れた部屋に居る事を実感した。

「じゃあ、あれはどうなってんだ」と、雨雄はモニターを指差しながらビオーヴェに向かい詰め寄った。

だが、ここで雨雄は家にあるレプリケーターならいざ知らず、リギンのレプリケーターでは、食べ物を作るのが精一杯である事に気が付いた。

「待てよ、もう1隻、船が居るぞ」と、外の情報をリギンのセンサーが雨雄に伝えてきた。

もう一隻の船とは二日後のリギンで、時間位相を同期させ、雨雄たちに姿が見えるようにしていたのだ。

その船から音声の連絡で、

『この時間はもう問題ない、君たちはご先祖様二人連れて、少し時空間の旅を体験させてあげてはいいかな』と、紛れもなく雨雄の声で通信が入ってきた。

「まあ確かに、二人がこの時空間に現れて、時間の流れが正常になったのだから問題は無いと思うが」と、つぶやくように雨雄が返事すると、

『まあ、俺を信じて時空間旅行を三人でしてみる事だな』と、今度はちよつと小ばかにしたような返答が返ってきた。

「ちくしょうめ、あの野郎何か隠してやがる」と、雨雄が毒づいたが、またしても

『なんだよ、自分が自分をけなしやがって、さつさと行きやがれ』と、向こうも毒づいてきた。

「まあまあ坊ちゃん、相手も坊ちゃんなんですから仕方が無いでしょう。」と、ちよつと意味不明な事を言つて、更にこう続けた。

「もう、ご先祖さまお二人がここに居ても意味も無くなつた事ですし、相手の言う事を聞いて、未来のイコムス星にでもお連れしては如何でしょうか。」

私はあまりお勧めしませんがね、どうも相手の坊ちゃんはそうしろとおっしゃっているようですからね」と、ビオーヴェが割り込んできた。

「それじゃあ、行く事とするか」と、しぶしぶ雨雄が言つて、別に座る必要も無いのだが、モニター前のシートに座り込んだ。

そしてみんなにこう言つた。

「当機はまもなく未来に向かつて離陸いたします。座席背もたれを元に戻し、シートベルトをお閉め下さい」

こう言つと、あつしや美奈代が立っていた所に床があ迫上がり、椅子の格好に形を変えていった。

雨雄は、その椅子に二人が座るのを見届けると、二人に、

「この頃の航空機は飛び立つ時こうアナウンスするんだろ」と、二人にウインクして見せ、リギユンの重力制動装置を船が加速した事を体で感じられるよう調整し、リギユンを大気圏外に向け発進させた。

船内のあつしと美奈代に軽いGがかかり、船が動き出した事を体

で知る事が出来た。

第11章 防戦 その1

「おい、いったいここは何処なんだよ」と、雨雄はビオーヴェに向かつて問い掛けた。

その時モニターが閃光によってホワイトアウトしてしまい、外の様子がモニターでは分からなくなったが、もともと雨雄にはモニターが必要でなかった。

しかし、同乗していたあつしと美奈代は、何が起きたのかさっぱり分からなかった。

リギューンのはあつしと美奈代を20世紀の地球で乗せ、32世紀のイコムス星に向かうためのタイムトラベルを抜けた所だった。

今回、空間移動する為のワーム空間移動中に時間移動、つまりタイムトラベルもしようと雨雄が言い出した。

そもそも、ワーム空間では通常空間と違い、時間の概念が今定義されていないので、この空間でタイムトラベルはしないよう時空局では呼びかけていた。

だが雨雄は空間移動しながら時間移動した方が効率的じゃないかと、無理押しした結果、何時の何処なのか分からない空間に出てしまったのだった。

「なんだあ」雨雄はモニターではなく、リギューンのセンサーで船外の様子を探してみると、「おい、上に何か居るぞ」と、雨雄が言った。

リギユンの上、上と言っても宇宙空間ではどちらが上で、どちらが下と言った定義が無いわけで、この場合上と言うのは、雨雄たちがリギユンの中で立っている方向での、頭の方の事になる。

そこにUSGの貨客船が有り、今は航行を停止していて、乗客や乗員らしき人たちが乗った非常脱出用の貨客用のユニットが、その船から四方八方に向かい離れていく所であった。

その船の船腹には「ACCONY」と、書かれているのだが、今リギユンは横を向いてその船と平行に並んでいたので、前方を映し出していないリギユンのモニターには、その文字が映し出されていなかった。

この船こそ30年前、雨雄の母が行方不明になり、また雨雄自信も攻撃を受け、あわやと言う所で晴雄に助け出されたと言う船であった。

雨雄たちは、雨雄が出発した時点より、30年前に戻っていたのだ。

しかし、雨雄はそんな事など露ほどもまだ知らなかったのである。

その事に気が付き自分の運命を知るのは二日後の事になった。

「やばいぞ、ASGUの駆逐艦級の船が、そのまた上に居て、こちの存在に気が付きやがった」と、雨雄が言った。

「戦闘回避行動を取りますか」と、ビオーヴェが提案したが、

「いや、暫く様子を見てみよう。今の状況では相手も上の貨客船をかわしてからでないと攻撃出来ない筈だからな。

それより、まだ船に残っている者は居ないか調べてみる」と言い、雨雄も独自にアコーニイ号船内に生命反応がないか走査してみた。

「一名、女の人があります。生命レベルが非常に不安定です」ビオーヴェが言った。

しかし本当はその横にも生まれて間もない子供が心肺停止に状態で横たわっていた。

おそらくその母親らしき女の人が倒れた衝撃で心肺が停止したのだろう。

だが雨雄たちはまず生命反応から人の搜索をしていたので、その子に気が付かなかった。

その女性こそ雨雄の実の母ルインダであり、横に転がっている子こそ雨雄自身だったが、現在の時間すら掴めていない雨雄にとって知る術は無かった。

いや、実はDNAの検査をスキャンすれば簡単に分かった事だったのだが、まさか自分に関係する人物であろうとは疑ってもいない雨雄だった。

「そうだな、通路に倒れているようだな、すぐに収容しよう」と、雨雄が言ったその時である。

今までこちらの様子を見ていたのか、動かずに様子を見ていたA

S G Uの戦艦が、こちらに武器があつて、ある程度戦艦にダメージを与えるような船だと判断したのか、武器システムを起動し始め、ゆっくりとリギユンを狙える位置に移動を始めた。

「くそ、動き出しやがつた、貨客船を盾に回避するか」と、言ったのと同時に残っていた女の人を、雨雄はリギユンに転送をしていた。

インターコムのおかげで、雨雄が思っただけで船のシステムが思うように動くので、二つの事をほとんど同時に行えた。

はじめ相手はゆっくりと動いていたが、リギユンがアコーニイ号を盾に回り込むように動くのを見て敵艦は徐々にスピードを上げてきた。

「あつしさんと美奈代さん、お二人にお願いがあります」と、雨雄が二人に顔を向けながらこう続けた。

「今、一人の女性を救助しました。この船の医療室に転送させています。その部屋に行つてその女性の様子を見てきてくれはしませんか」と、頼んだ。

二人には、今何が起きているのかさっぱり要領が得ていなく、ただ先程から、モニターに写る外の星がゆっくりと動いているのを、見ていただけだった。

「今何が起きているのですか」と、あつしが聞くと、

「敵の戦艦に追われていて、その戦艦が攻撃していたと見られる、銀河連邦の民間船から一人の女性を救助した所です。」

ちくしょうアンドロメダ連邦のやつら民間船を攻撃しやがって、卑怯先番な奴らだ」と、最後は独り言のように雨雄は毒づいた。

「しかし私たちには星しか見えないのですが、その戦艦や民間船はひょっとして目に見えない様に隠れているのでしょうか」と、あつしが尋ねると、

「ああ、それもそうだな今の船の位置からだと、2隻の船はモニターには写っていないくて見えないな、ちよつと船の向きを変えて、モニターに写るようにしてみるか」と、

雨雄が言つと、今までモニターに写っていた星が、ゆっくり動いていたが「すつ」と、早く動いた。

星が軌跡を残し、モニターいっぱいには白い線が現れたかと思つた次の瞬間、モニターに、まるでさんまの骨のような格好をした、宇宙船「アコーニイ号」が映し出された。

第11章 防戦 その2

アコーニイ号は、客や荷物を乗せるユニットを連結できるように一本の心棒の様なメインの通路から、一定間隔に出ているアームでユニットをロックできるようになっている。

それが、今船の最前部である動力部を残してユニットのロックが外れ、客が乗っていたユニットはそのまま緊急脱出シャトルとなつて切り離されていた。

乗客たちのユニットは船からかなり離れているが、荷物が載っていた物はその辺に漂っていた。

だから今、アコーニイ号はまるで動力部を頭とした、身を食べた後のさんまの骨の様に見えた。

そして、その向こうにこちらを狙う様に船首をこちらに向けた船が見えた。

それがASGUの駆逐艦級の戦艦であつた。

「あれがそうなのですか・・・」と言いかけ、何しろ戦闘のできる宇宙船など始めて見る物なので、あつしはただモニターを見入るだけだつた。

しかし美奈代はさつき雨雄が医療室に女性を救助したので、様子を見てきてほしいと言われた事が気になっていた。

「あのおう、医療室の方は何処をどう行けばいいのでしょうか」と

雨雄に尋ねると、

「あつ、そうだったな」と、一度モニターに向き直っていた顔を、再びあつしたちに向け、手であつしたちの立っている後ろの通路を指差しながら、

「その通路を行って、左手に部屋があります。今ベッドの上に女性横たわっています。その方を見てきて頂けないでしょうか。」

こちらでモニターは出来るのですが、やはり人がいた方がいいかと思しますので、お願いします」

「でも、私たちには医療の知識なんてないのですが」と、あつしが自信の無い返答をしたが、

「交通事故の時のように対処すれば良いのなら、私、少しの事なら分かるわ、アメリカに居た時運転免許を取る為に、講習を受けさせていたから」と、

美奈代が言つてあつしより先に通路の方に向かい歩き始め、医療室らしき部屋を見つけ入っていった。

あつしも美奈代の後を追ひ、部屋に向かった。

リギンが船首の方向を敵艦に向けた事により、敵艦がリギンも攻撃態勢に入つたものと見て、艦の前方主砲にエネルギーを充填し始めた。

「船越しに撃つて来るつもりらしいぞ」と、雨雄が言つと、ビオーヴェエが

「坊ちゃん、どうしますか」と、割とのんびり聞き返した。

「こういう時はだな」と、一拍置き、「逃げるんだよ」と、今度は早口でまくし立て、同時に船を反転させ、ジグザグにすばやく動きながらその場を離れたその時である。

今までリギンがいた場所めがけエネルギー光線が跳んで来た。

まさに間一髪危ない所だった。

そのエネルギー波はアコーニイ号をかすめこそしたが、アコーニイ号に多少の振動を与えた。

その振動はアコーニイ号にとって割と大きく、通路に横たわっている小さな雨雄の心肺を刺激するには十分な振動であった。

アコーニイ号に横たわっていた子供の雨雄は、「すうつ」と、息を吸い込むと、転んだ時に色々な所を打ち、その打った所が痛むのか、「うわぁーん」と、すでに誰一人いない船内で、大きな声で泣き出した。

ASGUの艦船は次々と、リギンに向かって撃って来た。

雨雄も必死でリギンを操りかわしていたが、このままでは何時か当たるのではないかと思い始めていた。

「このままワープするぞ」と、言った時である。

「前方に小型船がワープでこちらに向かってきています。このま

までは衝突します」と、ビオーヴェが言い終わらない内に、

「ワープ」と、雨雄は言った。

リギンがワープに入る直前、小型船がワープを抜けリギンの左前方に姿を現した。

そしてまだワープに入りきっていなかったリギンの左側に、相手の船の左側腹部に接触し、雨雄の乗っていたリギンは、反時計回りに高速で回転を始めた。

その頃、医療室では横たわっている女性、ルインダに「大丈夫ですか」と、美奈代が声を掛け女性の意識レベルを見ていた所だった。

「ここはどこ」と、聞き取るのがやっとの声でルインダは答えた。

「赤ちゃん。私の赤ちゃんはどこ」と、今度はあわてて美奈代たちに聞いた。

美奈代は「大丈夫よ、赤ちゃんは元気ですよ」と言うと、ルインダはその言葉に安心したのか、目をゆっくり閉じかけた。

「あなたの名前は、分かりますか。自分の名前がいますか」と、美奈代がこのまま意識が無くなるのを恐れしやべり続けた。

「あなたの名前は、なんていうのですか」と、逆にルインダが美奈代に聞き返した。

「えっ、私。私は美奈代よ」と言うとルインダも復唱するように「美奈代」と、言った。

その時である、美奈代やあつしは軽いめまいのようなものを感じ、
気分が悪くなりその場に倒れそうになった。

第11章 防戦 その3

リギューンは、重力コントロール装置によって少々船が極端な静動をしても、内部にいるとほとんど感じない。

しかし、船が極端に早い回転状態になった為に、重力コントロール装置ですべて打ち消すほど対処しきれなかった。

コックピットにいる雨雄にしても、同様にめまいを覚えていた。

更にリギューンも目を回していた。

リギューンのコンピューターシステムの主演算回路は、半固形回路で出来ていてそれは人間を含めた動物の脳のような作りになっていた。

当然思いつきりそれを回転させると、動物の脳と同じに目を回すような症状になった。

その目を回す事が、またしてもリギューンをワープだけでなく、タイムトラベルをしてしまう様な間違いを起こしてしまった。

リギューンの混乱したコンピューターによりタイムトラベルし、アコニー号が攻撃を受けた時間より更に10年ほど前のペリタン星に時空間移動したのだった。

そこは激しい戦闘の真最中であつた。

それは後に「ペリタン星奇跡の大勝利」と、語り継がれ、この戦

闘より後にはAUGUによる攻撃らしいものは、先程雨雄たちが遭遇したアコーニイ号の悲劇しかなかった。

ペリタン星は鉱物資源の豊富な惑星で、その周りを回る8個の衛星にも軽金属が豊富にあった。

ペリタン星全体が、第3宇宙域での宇宙艦隊工廠のようになっていて、星の周りには幾つもの宇宙ドックが軌道上を回っていた。

戦争をするならまず相手の生産拠点を叩くのが基本なので、この星はまさに格好の標的だった。

宇宙艦隊にしても第3宇宙域で、まず一番に守らなければいけない星だと言う事は判っていたので、たやすく攻撃出来ない様に星の防御システムは頑丈に構築されていた。

星の周りには24個もの迎撃用衛星が配備されていて、衛星同士もお互いを守るようその衛星に搭載されているエネルギー砲の射程内に隣の衛星が入るよう、それぞれが配備されていた。

その様な星を攻撃するには、圧倒的な戦力の差によって攻撃するのが一番良く、ASGUもその例に漏れることなく、二十の大艦隊を率い戦闘艦数も二百隻以上と言う大艦隊で奇襲を掛けてきた。

対してUSGは星に滞在している艦船は八十艦近くいたのだが、その中で戦闘可能な艦船は数十隻しか居なかった。

両者の勝敗は、戦艦の数だけだと火を見るより明らかで、USGの敗北は時間の問題だった。

戦闘が激しいのは星の防御システムが十分機能し、その頑強な防御システムによって激しいASGUの戦艦の攻撃を持ちこたえていたからにすぎない。

しかし、その防御システムも数で圧倒する敵戦艦によって少しずつ壊されていった。

一つ防御用の衛星が壊されるとその隣の防御用衛星が壊されていき、小さなほころびが徐々に大きくなっていき、今防御システムその物が崩壊しようとしていた。

頼みのUSGの第7、第8および第9宇宙艦隊の第3宇宙域警備艦隊は、第3宇宙域にばらばらに展開していた。

報を受け急遽ペリタン星に向かってはいるが、このままでは到着するまでにペリタン星が瓦礫の星となるのは目に見えていた。

そんな敗戦濃厚な所に、リギンは飛び込んでいったのである。

到着直後は出発直前のアクシデントもあり、雨雄も混乱していた。

ただペリタン星は歴史的にも有名な星なので、雨雄も何度も映像を見た事があり、一目見てここがペリタン星であることが分かった。

唯一違っていたのは、雨雄が暮らしていた時間のペリタン星では防御衛星が二重に配備されていた。

しかし、今、目にしているペリタン星は一重の防御衛星群しかなく、雨雄が知っているペリタン星とは少し様子が違っていた。

「ここはペリタンらしいが、俺の知ってるペリタンじゃないな」と、雨雄がリギユンに話しかけ、

「ちよつとこのコンピュータに接続してみるか」と、ペリタンの星のネットワークに接続可能な高さまでリギユンの高度を下げた。リギユンのその小さい船体と、雨雄の脳と直結された航行システムよって激しい戦闘の中をすりすりとりすり抜け、難なく地表近くまで降りて行けた。

雨雄にはここが何時の何処なのかという事も気になって居た。

それに先程救助した女性も、この船では治療が難しく、専門の医者に見てもらふ必要がある、彼女を収容してくれる病院も見つけたかった。

地表近くまで降りこの星のネットワークに接続し、雨雄はこの時空があつた「ペリタン星奇跡の大勝利」の時だと言ふ事を知り、武者震いをした。

検索によりルインダを収容できる病院を探し出し、その病院にも連絡が取れルインダをその病院に転送できる事になり、早速その病院に転送した。

病院に移動させられたルインダは医師達の「あなたは誰ですか、自分の名前が分かりますか」と、言う問い掛けに、

ルインダはまだ美奈代が傍に居るものと思い込み、「みな・・・よ・・・」と、切れ切れで小さな声で美奈代を呼んだつもりでいた。

それを聞いた医師達はこの女性の名前が「みなよ」であると思ひ込み、「みなよ」と病院のカルテに記された。

そしてルィンダはアコーニイ号で頭を打っていた事もあり、そのまま深い眠りに着き、更にそれまでの記憶を深層記憶の中に埋もれてしまい、自分の本当の名前すら思い出せず、この星で40年の歳月を過ごすことになった。

第11章 防戦 その4

雨雄は女性を船から降ろした事によって、幾分肩の荷が下りた様に思った。

しかし、実際に雨雄がした事は不可抗力と言え、雨雄自身が誰とも分からないままに、自分の母親を生まれて間もない自分と引き離してしまい、どこか知らない星に置き去りにする事になるうとは、この時思いもしなかったのだ。

ルインダをリギユンから降ろした雨雄は、この時空が何処の何時なのかはつきり分かった。

雨雄は今自分が居るのはあの有名な戦闘の最中に居ると判り、この戦闘に自ら参戦しなければならない理由は無かった。

しかし、このまま救助した女性を降ろしたから「それでは、はいさようなら」と、言う性格でもなかった。

実際このままでは地表にある施設まで、攻撃されかねない状況にあったので、雨雄も自ら進んでと言うより、ある意味喜んで攻撃に加わっていった。

雨雄はあの銀河外辺で宇宙艦隊に対して行った攻撃手法で、ASGUの艦隊を次々に破壊して行った。

銀河の外辺で合った銀河艦隊提督、シドフィル中将の言った言葉など、今は露ほども思い出さず、一心にAUGUの艦隊を攻撃していった。

雨雄はまず、とにかく大きい船からやつつけてやろうと考えた。

そこで、あたりのASGUの艦船の大きさをサーチしてみた。

大きな船、ギャラクシークラスの戦艦が20隻ほどいたので、それを攻撃目標にする事にした。

時空をずらしこちらの姿を隠し、そつと大型戦艦の近くに近づき、艦の急所をピンポイントで狙い撃ちして行つた。

ある時は航行装置の排出口、またある時は攻撃の為、砲門が開く瞬間を狙い、その中に高プラズマエネルギー砲を打ち込んでいった。

ASGUの艦隊は突然20の艦隊旗艦が次々と爆発炎上していき混乱し始めた。

リギンはギャラクシイ級戦艦と比べると人間と蜂ほどの差があり、当初は突然現れ一刺ししていくリギンにまったく気付かれなかった。

たまたま敵旗艦護衛にっていた駆逐艦級戦艦のセンサーが、高プラズマエネルギー砲を撃つ瞬間のリギンを捉えた。

しかしリギンは撃つてすぐに消えたので、リギンに対してまったく攻撃を与える事が出来なかった。

20艦近くあった旗艦を、ほぼ半数近く撃破していった頃、雨雄はふと思った。

『これだけの艦隊だから、この艦隊全体を統括している船がどこかに居るのじゃないか』と、この攻撃に来ている艦隊の配置をワイドレンジで探索してみた。

そうすると一隻の軽巡洋艦級戦艦の両脇に、二隻の重巡洋艦級の船が、敵攻撃部隊から少し離れた所に、まるで戦況を見るかのように戦闘行為もせずに停船していた。

雨雄はこの真ん中の船が間違いなく、この作戦執行の中心だと確信した。

そしてその感は当たっていて、この艦にはこの作戦を直接指揮する為に、敵の元帥が乗り合わせていて、この軽巡洋艦級船艦で戦況を指揮していたのだ。

彼らにはこれほどの数で一気にかたが付けられると思っていた。

更に作戦指揮艦になる軽巡洋艦級船艦は、重巡洋艦級船の船に二隻も守られていたせいもあり、比較的無警戒であった。

そこを雨雄は忍び寄り、その指揮本部のような作戦指揮艦を吹っ飛ばしたのである。

そこからは、完全にASGUの指揮系統がおかしくなっていた。

雨雄も残る大型戦艦を楽しんで、次々と撃破していった。

USG側はASGU側の指揮の混乱も手伝い、少しずつASGUの戦艦を押していった。

U S G側は、巡洋艦級の船を惑星に残る防衛用衛星に任せ、戦闘の出来る戦艦で小型の駆逐艦級の船をターゲットに絞っていき、とにかく敵の数を減らす事に専念していった。

最初敗戦は時間の問題だったU S G側は、雨雄のA S G U各艦隊の旗艦を潰す事によって大きく形勢が逆転し、少しずつU S Gの方がA S G Uを追い詰め始めた。

ある時期を境にA S G Uは撤退を始めたが、その頃には第三宇宙域に展開していたU S Gの三艦隊が駆けつけてきていて、撤退しようとするA S G U戦艦の退路に立ちはだかっていた。

U S Gは降伏を呼びかけたが、各艦隊の旗艦をほとんど失っていたA S G Uの艦隊は、ただの艦船の集まりでしか無くなっていた。

戦闘を途中で止めることすら忘れ最後まで抵抗し、ことごとく撃破されていった。

敵艦隊のうち、敗走して生き延びたのは20隻有余であった。

そしてここに「ペリタン星奇跡の大勝利」と呼ばれる戦いが、終わったのだった。

第13章 ペリタン星 その1（前書き）

いよいよ色々な疑問が、解けて行きます。

第13章 ペリタン星 その1

「こちらにどうぞ」と、その若い士官は雨雄を一つの部屋に案内した。

雨雄に今回の働きに感謝の言葉を述べたいと、ペリタン星の防衛担当司令官が、雨雄を艦隊の戦艦に招待していた。

あつし達には「すまないがこのリギユンで待っていてほしい」と、言って、一人だけで出向いてきていた。

あつし達は、今この状況が今だ現実なのかどうか、自分達でも信じられないので、頭を整理する意味でも、雨雄の言う事に従い、リギユンに残った。

部屋に入ると雨雄はどこかで見たような部屋だなと思い、何気なく「この船はなんて名前なんだい」と、その若い士官に聞いた。

「はい、この艦船はUSG作戦司令部直属の作戦指揮艦『ザイエルフイ号』です」と、直立になり、誇らしげに答えた。

雨雄はそのザイエルフイと聞いた途端、「ほう」と、言う顔になった。

そう、それもそのはずで、この船には4日前にこの部屋に通され、シドフィル中将と会談したばかりだった。

部屋の造りはほとんど変わっていなかったが、椅子やテーブルが新しくきれいだった。

そうこうしていると、司令だという人物が、「シドフィル中尉、この方があのガンシップに乗っておられた方かね」と、雨雄の方を見て軽く会釈をしながら、3人の部下と思われる人達と部屋に入ってきた。

雨雄は『シドフィル中尉』と、その司令が言った時おどろいた。

『そうか俺たちはここで合う事になっていたのだな』と、心の中で思ったが、その事は口に出さなかった。

雨雄にとって4日前、この部屋で中将となり、提督の称号を持ったシドフィルに会っていたのである。

司令官たちは一通り挨拶をした後、雨雄に今回の戦績に対し「ここに仮にはありますが銀河連邦を代表し、感謝の言葉を申し上げます」と、言う言葉でこの会談は締めくくられた。

司令官たちは、もう少しゆつくりと戦術などについて話を聞いたのだが、今はペリタン星の復旧が最優先なのでこれで失礼させてもらいたいと、雨雄との会談もそこに席を立った。

部屋を出るとき、司令官が「よければこのシドフィル中尉は作戦技術仕官なので、彼に今回の戦術について少し話してやってくださいだろうか」と、

司令官は雨雄の返事も待たずそう言って、せかせかと足早に部屋を出て行った。

雨雄の心の中はそれ所ではなかった。

戦闘中に敵のミサイルや、エネルギー光線がペリタン星にも流れ弾として当たっていて、戦いが終わりに近づいた頃雨雄が地上に降りてみると、女性を降ろした病院も直撃を受けていて、その病院の患者やスタッフの所在が確認できないでいた。

病院の有ったあたりや、ペリタン星政府のネットワーク網に入り込み調べても見たが、情報が得られないでいたので少々イライラしていた。

テーブルの対面の椅子にシドフィル中尉が座りこみ話しかけてきた。

「先程の攻撃はどの様にしたのでしよう。と言うよりどの様にしたら気づかれずに、あんなに近くまで近づけるのですか」と、聞いてきた。

雨雄の頭の中では女性のことを考えていたので、シドフィル中尉の言葉を上の空で聞き流していた。

それに、雨雄はあらかじめ彼が何を聞いてくるのか分かっていたので、あまり話に集中していなかった。

雨雄が黙り込み、あらぬ方向を見て黙っているのを見て、「あ、う、何か私がお気に召さない事でも言ったでしょうか」と、おずおずとシドフィル中尉が聞くと、雨雄もやっと気を取り直して、

「ああ、すみません。ちょっと気になる事があって、シドフィル中将、あつ、いやシドフィル中尉でしたっけ、ヒントだけお教えしておきます。

今回の戦術はタイムマシンと、時間の波の問題です。そして今はこれ以上の事は話せません」と、一気に話して、

「私も調べたい事がありますので、これで失礼してもいいでしょうか」と、言って雨雄は椅子から立ち上がろうとした。

「ああそうだ、続きを聞きたければ40年後に、この宇宙域の銀河外辺で艦隊を引き連れて待っていてください、提督」と、最後の『提督』と言う言葉は、相手に聞こえるかどうかと言う位小さな声で雨雄は付け足した。

「えっ、ちょっとお待ちください。それだけでは・・・私には何の事やら分かりません。それに私の事を中将と勘違いなされた。どう言う事でしょうか」と、シドフィル中尉は引きとめようとしたが、

雨雄は「40年後、その時話します、それでは退艦許可をください」と、言って部屋から直接リギュンに転送で帰って行ってしまった。

『40年後！タイムマシン。いったい40年後になにがあるのだろうか。もしかしてあの人は未来から来た人で、このピンチを救いに来たのだろうか』と、シドフィル中尉は一人部屋に残され、自問自答していた。

未来から来たのは合っていたが、雨雄はUSGがピンチと知り、自ら助けに来た訳ではなかった。

その事は、今のシドフィル中尉に分かる事ではなかったし、知った所であまり意味の無い事だった。

第13章 ペリタン星 その2

リギュンに帰った雨雄はあつしと美奈代にもう少しここに居て、先の女性を捜索したいと言った。

「そうですね、私たちも残って頭の整理をしていたのですが、整理しようにも私たちの時代ではとても理解できない事だらけです。

と言う事で理解しようという事は諦めました。ただやはりあなたと一緒に先程の女性の安否は気になりますから、私達にも何かお手伝いしたいと思っています」と、あつしは申し出た。

「協力の申し出ありがとうございます、しかし失礼だとは思いますが、あなた方には多分何もしていただく事はないと思いますので、そこに腰掛けて待っていてください」と、雨雄が言った。

雨雄は救助直後行った、彼女の生体モニターデータを見直す事から始めた。

すでに治療室は掃除されきれい綺麗になっていたが、ルインダの寝ていた時の髪の毛がベッドに数本の残っていた。

その髪の毛からDNAデータが何かの足しになればと思い、病院に転送する際一緒に送っていた。

そのデータを雨雄は再検討しようと呼び出し、まず何処の誰なのかを特定しようとリギュンのデータベースとの照合を始めた。

しかし、照合その物はリギュンのコンピューターが処理するので、

雨雄は特に何もする必要が無く、当然の事ながら、ただコンソールの前に座っているだけになった。

またあつしや美奈代も、何をするでもなく雨雄の後方に出発の時に用意された椅子に、ただ黙って座っているだけとなり、コックピットの中に静寂が、三人の気まずさを漂わせていた。

もともと、ただ静かに黙って座っている事など出来ない雨雄は堪りかね、

「おいリギユン、貨客船が襲撃されていた時に、記録された映像を出してくれないか」と、リギユンに命じた。

「最新の映像でよろしいでしょうか」と、そうリギユンは確認してきた。雨雄は特に何も考えず「ああ」と、だけ答えた。

前方のスクリーンがペリタン星の丸い一部を映し出していたのが、切り替わり、あつしたちも見覚えがある光景が出てきた。

それはただ星だけが写っていた光景だった。

「この映像はもういい、ほかの角度からの記録がないのか」と、雨雄が言っていると、

「あの時空に出て、船を感知してからのがあります」と、リギユンではなく、ビオーヴェが答えた。

「なんでお前が答えるんだよ」と、雨雄が不服そうにビオーヴェに向かって言っていると、

「リギューンは照合中で忙しく、私に答えてほしいとの事です」と、ビオーヴェが言うと、

「そんな事俺たちの間で、わざわざ言わなくてもいいだろうに、なんでだ」と、再び雨雄が言うと、ビオーヴェは澄まして「お客様サービスです」と、言っであつし達の方を見て軽く会釈をした。

雨雄はやれやれと言った風に手をひろげて、

「分かったよ、じゃあその映像を見せてもらおうか」と、ひろげた右手をスクリーンの方を示し、ビオーヴェを促した。

その映像はいきなり強い光線が発せられる所から始まっていた。

骨のような貨客船、そしてその骨みたいな骨格の合間から見えるASGUの駆逐艦級の戦艦の前方に砲身ではなく、何かエネルギー光線を発するパネルの様なものが大きく開いていた。

「あいつら何をやってたのかな」と、ぼそりと雨雄が言ったが、それに対してはビオーヴェもあつし達も何も答えなかった。

しばらく見ていたあつし美奈代が、こそこそと話し始めた。

「アコーデイオンみたいだからじゃないか」と、あつしが美奈代に言うと、「私には『アコー』しか見えなかったんだけど、アコーデイオンみたいに長くは無かったわ」と、美奈代は、あつしを否定した。

「あのう、お二人で何の話をしているのでしょうか」と、雨雄が聞くと、あつしは、

「たいした事では無いのでお構いなく」と、なんだか邪魔になったのではないかと申し訳なさそうに答えた。

「いや、何か気になる事があれば教えて下さい。思わぬ所に手がある時があるものですからね」と、雨雄はあつしに再度何を話していたのか聞きなおした。

「映像にさきほど船名が書かれていた様に見えたのです。『アコ』何とかって、書いてあった様に思っただけを私が船の恰好が『アコーデオン』みたいだから、『アコーデオン』って書いてんじゃないかって言っただけですよ」と、あつしがそう言うのと、

「それはどの辺りで出ていましたか」と、雨雄が聞き返したが、

「どの辺りと言われても、ゆっくりと再生してもらったら分かり易いのですが・・・」と、あつしはちよつと自信無げに言うのと、

「それでは逆再生してみましようか」と、言って前を向くと、すでにモニターの映像は逆再生されていた。

「ああ、そこです。ちよつと行き過ぎました。もう少し行った所です」と、あつしが映像の場所を示してきた。

第13章 ペリタン星 その3

あつしの言う場所で映像を止めてみると、そこに船首に近い部分が写っていてうつすらと船体の横に「ACCO・・・」と書かれてあった。

雨雄は「ン！」と、小さな声をだし、しばらく考えて「リギюн、すまないがDNAの検索は後にして、ちよつと貨客船のリストから分かっているやつだけでいいから、『ACCO』で始まる船名の船を探し出してくれ」と、言った。

リギюнがその検索結果を出す前に、雨雄はすでにこの船の名前がおおよそ分かっていた、と言うより予測していた。

ただ、その答えを雨雄はまさかと思い、また信じたくないと思っていた。

程なくリギюнのコンピューターが、検索結果を報告してきた。

「『ACCO』で始まる貨客船は現存する船はありません」であったが、雨雄は「過去に『ACCO』とあった船はあるか」と、聞きなおすと、

「過去に一隻、ASGUの攻撃で破壊された『ACCONY^{アコニー}』と言うのがあります」

そのアコニーと言う船名を聞いて、雨雄は頭の回路がショートしたかのように、しばし体の全ての動きを止めた。

女性のDNAの検索を再開していたリギューンは、ある人物とDNAのデータが一致する事を知らせた。

それは、雨雄が今一番考えたくない、そうであってほしくない人物の名、それは雨雄が思っていた通りの人物、「ルインダ」だった。

雨雄はしばらく頭の中を整理してみようと、色々と考えてみた。

『まず、俺がペリタン星に連れて来たのは実の母のルインダだった。まずはここからだな。』と、一人で一つうなずき、『今の義母、美奈代はペリタン星から来たという事だった。』

義母は先日倒れ病院に担ぎ込まれ、そこでのDNA検査で母ルインダとDNAが一致すると医師に告げられた』と、ここまで考えると、疑う所が無くなった。

『母さんはあのASGUの攻撃で死んだ訳では無く、俺がアコーニイ号から連れ去り、ペリタン星に置き去りにし、後に晴雄の前に現れ、二人とも元の夫婦とは知らず、再婚していたのか』と、そこまで考えると何故かブルツと寒気がした。

その理由の一つとして、母はこのままいくら捜しても見つからないだろうと言う事、それはすでに30年前、母ルインダが死んだと思われた直後、義母美奈代が現れ30年間ウエスターと共に4人で暮らしている。

今いる時空は過去ではあるが、雨雄の時間軸から言えば4人で暮らした30年間の延長線上にあり、義母がペリタン星から来たのは、もうすでに起った事なので、雨雄がどうあがこうが過去を変えることが出来ないのである。

その事を理解した雨雄は、実の母ルインダと判ってから、母を捜索し連れ帰りたい気持ちが増していたが、手をグツと握り締め、その気持ちを手の中で潰すように押えた。

仮にいくら時間をかけ、搜索しても見つからなかったらうし、雨雄がした事は母の命こそ自分が救ったことは間違いなのだが、同時に幼い雨雄の命を自分自身で救っていたのだ。

「よし、とりあえずでもないが、君たちを元の所に返そう、そして俺は帰るべき所に帰る事にしよう」と、あつしと美奈代の方を見てそう告げた。

「しかし、救助した女性はどうするのですか、ここに置き去りにするのですか」と、美奈代は女性と一言一言、言葉を交わした事もあって彼女の事を心配した。

「それは地球に帰る船内で、少しずつ話しましょう」と、言って雨雄はUSG戦艦ザイエルフィの、シドフィル中尉に連絡を取り、

「40年後、銀河の外延で待つように」と、念を押してから、「それでは私たちは帰るべき所に帰ります」と、別れの挨拶をして出発した。

第13章 ペリタン星 その4

帰る船内で、雨雄は二人に今までの記憶を消そうと、記憶消去光線を浴びせようかと思った。

しかし、よくよく考えると、そもそも雨雄がここまで来たのは、二人が記憶を頼りにビデオディスクに残した事が発端だった。

記録に残す為には、記憶を消す事は所詮無理なのじゃあないのかなと、思った。

ここで記憶を消そうが消さまいが二人がディスクを残す事は、雨雄にとってもうすでに起きた事なので無駄であった。

ただ一つ、彼らの記憶の中に刻み込まれているかどうか分からない事が一つあった。

それは雨雄の二の腕に、蝶のあざがある事を二人は知っているのだろうか、言う事だった。

「実を言うと先程救助したのは、私の実の母なんです」と、雨雄は切り出した。

「まあ、」と、美奈代は驚いた。

あつしも驚いたが何故今その事を、雨雄が今になって話すのか判らなかった。

「お二人を乗せ最初に出た時空間が、私の母が行方不明になった

貨客船が攻撃されている所でした。

しかし私は無理なタイムトラベルで、何時のどの場所に出たのか皆目見当がつかなかった。

時間を掛ければ判ったのでしょうが、あなた方も知っての通りそんな余裕がありませんでした」と、ここまで言って、一息つき腕まくりをして二人に腕のあざが見えるようにした。

「逃走しようとワープに入る直前、他の船が・・・」と、そこまで言つと、「なんと」と、意味不明の言葉を雨雄が口にした。

「あの船はリギンだったんだな、そして俺のおやじが俺を助けに来たものだつたのか」と、「うんうん」と、言つようにうなずきながら、一人納得していた。

「なんですか」と、あつしが聞くと、

「ああ、申し訳ありません。今リギンが過去のこの船の行動の記録を教えてくれたんです。

その中に私を救出に行った時の様子を知らせてくれました。

それは私の父があのアコーニイ号の窮を聞いて、現場にワープで駆けつけ様とした時、ワープを抜けた途端リギンと同じ位の大きさの船と接触したと言う事です」と、雨雄は説明した。

「へえー、この船は親子二代で乗り継がれているのですか」と、あつしが言つと、

「いや、父は、あの時母を助けられなかった事はおろか、その後必死の搜索にもかかわらず、残骸の中から母の痕跡すら見つける事が出来なかったのは、自分の勝手でこの船で飛び回っているのが原因だと思い込み、その後すぐに船を骨董屋に処分したのです」と、言った後、また考え込むように黙り込んだ。

そして雨雄は「私は今思うと、果たしてあの女性、いや母を救出したのは正しい判断だったのか判らなくなりました」と、少々うなだれた。

「私はそこに救助が必要な人が要れば救助する。

その考えは間違っていないと思います。

もし躊躇して救助できない事になれば、まさに『後悔先に立たず』です。

あなたのした事は間違いなく、正しい事をしたのです」と、あつしは弁護士らしい口調で、雨雄を勇気付ける様に、きっぱりと断切った。

「ありがとう、御先祖様に勇気付けられるなんて光栄ですね。

ところで話しを元に戻しましょうか」と、少々照れながら、今度もわざとゆっくり腕まくりを降ろした。

「ワープに入る直前リギンが回転し、ジェル式の演算装置を使っているコンピューターが混乱を起こし、またまたとんでもない時空に私たちが放り出されたわけです」

「もつとも、時間の神様は・・神様と言うものが居ればですが・・この事は最初からこうなる様に仕組んでいたんでしょね」と、自嘲気味に雨雄が言った。

『なるほどね』と、言うように声には出さないが、あつしと美奈代は顔を見合わせうなずき合った。

「そこで最後になりましたが、何故母と判っていて探さないのかと言うと、彼女は今降ろした星、ペリタン星と言います。

そこで母は、過去の記憶の無いまま10年過ごし、10年後友人の紹介で再び父と出会い、また過去の記憶の無いまま30年を過ごしています。

当然私も一緒です。これは私にとつてもうすでに起きた事なので、過去に帰って変える事は出来るのですが、それをする未来にどのような影響が出るか判らないので、過去を変えるような事はご法度なのです」と、雨雄は丁寧の説明した。

そうこう話している内に21世紀の地球、ドイツの事故に遭った坂に程なく到着した。

今回はちゃんと帰るべき時空に時空ブイを置いていて、その時空に帰るのが正確に出来た。

ただしそこには2日前の雨雄たちが居るので、最初から時空の位相をずらし周囲からは見えなくしていた。

到着は車がぶつかる前にして、ぶつかった瞬間にあつしと美奈代を眠らせた状態で、二人を車の前に降ろした。

2日前の雨雄たちがそこではやばやしていたので、雨雄は通常通信でこう告げた。

「この時間はもう問題ない、君たちはご先祖二人連れて、少し時空間の旅を体験させてあげてはいかかですか」と、雨雄が言うとうこうは戸惑っていたようなので、更にこう続けた。

『まあ、俺を信じて時空間旅行を三人でしてみる事だな』と、言うとうこうから、

『ちくしよめ、あの野郎何か隠してやがる』と、帰ってきたので、駄目押しのつもりで、

『なんだよ、自分が自分をけなしやがって、さっさと行きやがれ』と、言っていると暫くすると、やっと動き始めた。

それを見て雨雄もリギンを始動し、ここより遙か未来の自分たちの住む時間へと帰っていった。

第14章 家族 その1

地球の西暦で言う33世紀のイコムス星に帰ってきた雨雄は、家族を母の冬眠カプセルの前に集めた。

今日は他にクラスミ家のおばさんと、長男の奨一、次女の恵子とが、美奈代のお見舞いに来てくれていて、総勢6人いた。

晴雄は美奈代が倒れてから、酒を飲むのを控えているので見るからに元氣そうだった。

それに引き換えウェスターは何処かしら元氣が無く青白い顔をしていた。

クラスミのおばさんからは、「あんた元氣が無いわね。何処か具合でも悪いんじゃないのかい、4日前はあんなに元氣だったのにねえ、」と、会った早々言われた。

「ちょっと、めまいがするんだけど、大丈夫よ、安心して」と、言っておばさんを安心させていた。

「雨雄。何の用事があつてここにみんなを集めた」と、晴雄が切り出すと、

「この4日間で俺は三度過去に行ってきた。最初は単純に俺の・いや、我が家のご先祖を尋ねにいく事が目的だったけれど、過去に行く事自体はあまり問題じゃなかった」と、雨雄は一呼吸入れた。

「最後のタイムトラベルで、俺はあつしさんと美奈代さんを未来

に招待しよう」と、二人を船に乗せてこの時間に帰ってこようとした」と、ここで「ふっ」と、息を吐いた。

「だけど、俺の性格は皆も知つての通りせっかちなんだよね。

よりによつて、タイムトラベルとワープを同時にしちまつたんだよ。

時間を移動しながら、空間も移動したらイコムス星に帰るのも早いだらうと思つたんだ」と、雨雄が言つた時横から晴雄が、

「馬鹿な事を、そんな事をしたらタイムブイの位置をコンピューターが見失つちまうじゃないか、それでいつたいどうなった」と、少々呆れ気味に言つて、雨雄の次の言葉を待つた。

「リギユンは見事にタイムブイを見失つちまつたよ。そして着いた所が今から30年前の、あの事件のあつた場所だつたのさ」と、言つて手を頭の上まで持ち上げ、自分でもばかばかしいと言つような顔をして、手のひらをひらひらとさせた。

「あの事件のあの場所だけじゃあ、何処の何なのかさっぱり分かん。だがまてよ30年前の、つて、お前まさかアコーニイ号のあの事件か」と、晴雄は多少自信無げに雨雄に聞くと、

「ああ、そうだまつたくその瞬間だつた。

しかし到着した時は何処のどの場所か全く判らなかつた。

出た所はアコーニイ号を挟んでASGUの戦艦の死角に居た。

その内ASGUの戦艦に見つかった。

まあ見つかるまでに、ある人をアコーニイ号から救出したんだけどな」と、言って皆の顔を見回した。

「ある人って、だあれ」と、ウエスターがひよつとして実父ではないかと、期待を込めた目で雨雄を見ながら、しかし体調が悪くかすれた声で弱々しく元気なくそう聞いた。

「それは・・・」と、雨雄がここで切るものだから、みんなが前に身乗り出し、次の雨雄の言葉を待った。

「織田・ルイнда。そう、あの事件で行方不明になっていた俺の母親であり、おやじの嫁さんだよ」と、やりきれないと、いった風に雨雄は下を向いた。

ウエスターは「そう」と、がっかりした様に小さく言った。

晴雄は「そ、それでどうしたんだ母さんは、今何処に居るんだ。

つれて帰ってるんだろう。

どこか具合でも悪く病院にでも行っているのか。

それともUSGの方で事情聴取でもされてるのか」と、

いくつもの質問をいっぺんに雨雄に浴びせたが、雨雄は一つ一つの質問が出るたびに首を横に振り否定していった。

「じゃああ、母さんは何処に居るんだ」と、語気を強くして晴雄

は雨雄の襟首を掴んで、前後にゆっくりと揺さぶるように聞いた。

「おやじ、」と、雨雄、「ん、」と、晴雄。

「痛てえんだよ」と、雨雄は晴雄に手を離すように晴雄の手を押えた。

「ああ、悪い、つい興奮しちゃった。」と、言って掴んでいた襟首を離し再び、

「母さんは何処に居るんだ」と、今度は冷静に低い声で雨雄に聞いた。

「救助した時は攻撃されている船が、アコーニイ号とさえ判らなかった。

まして救助した女性が俺の母親だなんて誰が想像できると思う」と、

雨雄が言い、さらにこう続けた。

「救助した途端、ASGUの戦艦に見つかっちゃって追われだしたんだ。

そうこうしている内にやつら撃ってき始めて、俺は逃げなければやられそうになった。

ワープしようとした途端おやじが乗ったリギンにぶつかっちゃまったのさ」と、

別に晴雄が悪い訳ではなかったのだが晴雄の方を見返した。

晴雄も睨まれたみたいになり思わず、

「いや・・・すまん」と、謝ったが、なぜ俺が謝らなくちゃならないのか思ったが、声に出たのは他の事だった。

第14章 家族 その2

「ちょっと待てよ。じゃあ、あの時ぶつかった小型船みたいなやつは、お前だったのか」と、

晴雄は雨雄を指差しながら言った。

「ああそうだ、俺もおやじが乗っていたなんて、丸一日判らなかつた。

ペリタン星で整理してた時に、リギユンに残っていたの記録の中から間違いなく、俺と昔のおやじが乗っていたリギユンとがぶつかった事が判った」

「俺の方はぶつかる直前、ワープであの場所から逃げようとしていた。

ぶつかって船がキリモミ状態になっちまって、ワープするように命令した。

だけどコンピューターは混乱しちまって、またもやワープとタイムトラベルと同時にしちまったんだ」と、

雨雄は息継ぎの為言葉を切ると、つかさず晴雄が、

「で、何処に着いたんだ」と、話の続きをせかした。

「着いた所は・・・」と、雨雄、

「着いた所は？」と、みんな。

「今から40年前のペリタン星だった。

そう、あの『ペリタン星奇跡の大勝利』と言われる戦闘が始まったばかりの所だったよ。

そこで俺は救助した女性のメディカルチェックでリギンでは十分な治療は出来ないと判り、とりあえず目の前にある惑星に降ろそうと決めた。

星の様子から、かの有名なペリタン星だとすぐ判ったけれど、どの時代かも判らないので、戦闘の様子からここ50年以内だと推測しネットに繋いで見た。

そして病院を探して母さんを降ろしたんだ。

ちゃんとメディカルデータを付けてね」と、そこまで話した。

そこまで誰も口を挟まなかったので、一気に話したがペリタン星にルインダを降ろしたと聞いた晴雄が、

「ペ、ペリタン星に降ろしただと、場所が判っているのなら今から迎えに行こう」と、またしても雨雄の腕をつかみ、

「30年前のあの場所につれて帰ろう、そうすれば何もかもうまく行く、そうだうまく行くだよ」と、

今度は完全に我を忘れ雨雄を激しく揺さぶった。

「おやじ」と、雨雄はゆつくりと、そしてしっかりと、低い声で晴雄をなだめるように言った。

「だめなんだよ、おやじ」

「なんでだ、時間も場所もはつきり判ってるのに、何故だめなんだよ」と、

晴雄がまるで子供の様に口を尖らせ不服そうに言ったが、雨雄は、
「降ろした病院は戦闘中に破壊されたんだ。

中に居たほとんどの患者は無事に難を逃れたんだけど、戦闘終了後多くの患者や病院スタッフの証言で、病院が破壊される前に不思議な男が現れ皆を救ったそうさ。

そして母さんと共にその男は何処へとも無く消えたそうだよ。

それに、父さん自分はどんな職業か忘れたのか」と、

雨雄が言ったが、晴雄は、

「それがどうした。今そんな事が大事なのか、俺にとって大事な事はルイ نداを元の時間に返す事だ」

「おやじ、冷静に考えてみる。2日前このドクターが何て言ってたか覚えているか。母さんはここに居るんだ」と、冬眠カプセルを指差し晴雄に言った。

「それがどうした」と、なお納得のいかない顔で晴雄が言ったが、

「時間の不文律だよ、父さんなら判るだろう。」

もう母さんはあそこから帰れない、返してはいけないんだよ。

母さんは10年間ペリタン星で暮らし、その後連れ合いを亡くしこのイコムス星に移り住んだんだよ。

俺たちの時間軸では母さんは40年前から暮らしてたんだよ」と、言った所でウエスターが崩れる様に倒れた。

「あら、まあ」と、クラスミのおばさん。

「早く、ドクターを」と、奨一が叫び、すぐさまドクターが呼ばれた。

検査の結果は、ウエスターの症状は美奈代と同じ症状である事が分かった。

詳しい事はまだ知らされなかったが、どうやら遺伝的な要素があるらしく、ドクターにウエスターも冬眠カプセルに入れる事を薦められた。

「まあ、美奈代さんだけでなくウエスターちゃんまで・・・かわいそうにねえ」と、涙ぐんでいた。

「おばさん、姉さんは別に死んだ訳じゃあないよ。きっと治療法が見つかって助かるよ」と、雨雄はおばさんの肩を抱きしめた。

第14章 家族 その3

晴雄は美奈代と同じにして欲しいとドクターに頼み、ウエスダーも冬眠カプセルに入れられ、一同は病院から帰り、織田家の居間で話の続きをする事にした。

「おやじ、さっきはモニターが無くて、ある映像を見せられなかったけど、これを見てくれ。」

この映像はUSGの艦隊が戦闘に協力してくれたと言う事で、特別に渡してくれた映像なんだ」と、

そう言つて壁に掛かっているモニターに、リギンから映像をダウンロードして映すようにコンピューターに命じた。

その映像は病院らしい所が映っていた。そこに男が現れ何か騒いでいた。

最初は男が向こう向きだったので顔は映し出されていなく、ただ必死で病院関係者に何かを訴えているように見えた。

男は最初後ろ向きで話していて顔が映っておらず、誰だか判らなかったが、こちらに向いた時一同は「えっ」とか、「おっ」とか声が思わず出た。

そこに映し出されたのは晴雄だった。

「お、俺が何であんな所に映ってるんだ。これはいったい何処を写してるんだ」と、思わず晴雄が言った。

雨雄は、「これはペリタン星の母さんを降ろした、病院の監視カメラで取られたものだ。

この映像の隅に病院のマークが入っているだろう」と、雨雄は証拠を示しながら言った。

「しかし何で俺が・・・」晴雄は、行った事も無い病院の監視カメラに、自分が映っている事に納得いかない様子でいた。

「そう、その事だよ、なぜ親父があそこに居て写っているのか。

いや、正確に言うて居たのか。

俺なりにある仮説を立てて推測してみた。

その仮説を裏付ける為にさっき病院で姉さんに頼んで、姉さんのDNAのデータをこっちに送ってもらうように頼んでおいたんだ」と、

雨雄はここまで言って、いったん話を切った。

しかし晴雄は急かす様に、「推理って言ったよな。それはどんなものだ」と、雨雄に聞くと、

「それは、姉さんとおやじが本当の親娘だしたら、美奈代の義母さんがおやじと一緒に暮らしていたと、言う推測だよ」と、言う

と、

「まあすばらしい、ウエスター姉さんとおじさまが親娘だなんて、

すてき」と、姉妹でもないがウエスターの事を、姉さんと慕っている恵子が感嘆の声を上げた。

「俺はアコーニイ号の事件について、イコムス星に帰ってから調べ直してみただ。

そうすると面白い事が判った。

それはあの船に美奈代義母さんの連れ合いも乗っていて、その人も行方不明になっている。

母さんと同じにまったくの手がかりが無くね」と言った時、病院の方からウエスターのDNAのデータが届いたと、コンピューターが知らせてきた。

雨雄は、晴雄に晴雄自信のDNAのデータも、家の方にダウンロードするように頼んだ。

早速雨雄は、コンピューターにウエスターと義母美奈代、および晴雄のDNAデータでそれぞれが親子であるかその確率をコンピューターに計算させた。

程なくしてコンピューターが「三人が親子である確率は99.9%です」と、計算結果を知らせてきた。

数字的には100%では無いが、これはほぼ間違いなく親子であると言う事であった。

「やはりな、おやじはペリタン星に行き、母さんと10年暮らし、

母さんとの間に子供をもつけるんだ。

その子供がウエスター姉さんで、おやじはアコーニイ号の事件で居なくなるんだ」と、雨雄は確信を持ってそう言い切った。

「俺がペリタン星に行くだと、そんな馬鹿なことが出来るわけ無いだろう」と、晴雄は否定した。

「俺は母さんを誰だか判らないまま助け、ペリタン星まで運んでしまった。

その為におやじは母さんを助け損なったとずっと思い続け、その思いからずっと酒浸りでいたんだだろう。

だけど、今母さんを助けしかも10年暮らせるチャンスが出来たんだぜ」と、

雨雄はそう晴雄に説得するような口調で言った。そして更に、

「それともこれからもずっと酒浸りで暮らす方がいいのかよ」と、

雨雄はそこまで言って晴雄の返事を待った。

第14章 家族 その4

クラスミ家の一同も息を潜め、皆緊張した面持ちで晴雄の顔を見ていた。

晴雄にとって今ペリタン星に行けば、雨雄の言う通りの生活が出来るだろう、しかしそれは過去に行くという事になる。

今更ながらでは有るが、自分はこれでも第三宇宙域の時空局の局長を務めている人間だ。

その自分が過去にタイムトラベルをして、過去で10年も暮らすのは自分の仕事を否定する事になり、職務に対して背任の念が生まれて来たのである。

そしてこう切り出した、「しかし、時空局長の俺が過去に行くのは無理だ」と、晴雄は諦めのような口調で小さいくそう言つと、

「おやじ、何か肝心な事を忘れていないか。俺が病院でなんて言つたか覚えてないか」

すると晴雄が、「何て言つたんだ」と、ちよつと思ひ当たらないなど、言う不審顔でそう尋ねると、雨雄が、

「俺はすでに、ここに母さんが居ると言つたんだ」と、雨雄が言う

「それは確かにさっき言つたが、そりゃあ確かに母さんはあそこで眠っているさ、俺にもちゃんと目がついてんだから見りゃあ判る

さ」と、

そんな事言われなくても判るさ、とでも言いたげにそう言つと、
それまで黙つて二人の会話を聞いていた奨一が、

「あつ、そうか雨雄君が言いたいののは、おじさんとお婆さんが暮らすのは、すでに過去の事でもう起きた事なんだって言いたいんだよ。

確かにおじさんはまだここに居るけれど、これから過去に行き暮らさなければ、ウエスターが生まれてこない。

しかし、既にウエスターが生まれているって事は、おじさんが過去に行つて暮らす事はもう起きた事なんだ」と、ふつと答えがわかつたので、思わず大きな声でいつきにそう言つた。

「大あたり」と、雨雄はそう言つて、「俺はうまく説明できなかったが、奨一さんがうまく説明してくれたよ。

おやじ、もうおやじがペリタン星に行くのは40年前に決まっていた事なんだよ。

この事に逆らう方が、時間の不文律に多分逆らう事になると俺はそう思う」と、雨雄は付け足した。

晴雄は思わず「何故だ、俺はアコーニイ号に居る母さんを救出に行けないのか」と、言つて目の前の机に顔をガツンとぶつけた。

割と強く打ち付けた為、顔に軽い傷跡が付いた。

その傷は少々皮膚を切り額から血が出てきた。

それを見た恵子は、あわてて切り傷用のテープを持ってきて、晴雄の額に張った。

クラスミのおばさんは、そのテープを見て「あら、あの時のあつしさんだ」と、ポツリと言った。

クラスミのおばさんはペリタン星で戦災に遭い、その戦火をかるうじて逃れ、当時長男がお腹に居て戦闘が終わった後、すぐにガジヤド星に帰る為に空港を急いで歩いていた時の事を話し始めた。

あまりに急ぎ足だったため。倒れそうになった。

そこに「あつし」と名乗る男が居てその男に助けられ、長男と共に無事ガジヤド星に帰れた事。

そして後に連絡を取り合うようになり、その家族とも仲良くなり、家族同士の付き合いをするようになったと、昔話をした。

その「あつし」と最初に会った時に顔にテープを付けていた。

その傷は戦闘によるものだと思って、あまり気にしていなかった。

今こうして見てみると、あのテープは、今晴雄さんが付けている所と寸分違わない所に付いていて、晴雄が間違いなく「あつし」だと言いつけると、言った。

晴雄はそこまで言われようやく決心し、リギユンに乗り出発する事にした。

出発は、おばさんの話での晴雄の様子から、すぐだと言う事になった。

晴雄は雨雄に10年後あのアコーニイ号に迎えに来るよう言い、母さんとウエスターを見ていてくれる様に、言った。

雨雄は、「治療法が見つかるまで、母さんたちは寝ているだけだから、俺でも大丈夫さ」と、軽くうなずき「だからおやじは心配せずに行ったらいいさ」と、極力晴雄に気がかりにならないよう言った。

晴雄は雨雄のリギンに乗り、40年後のペリタン星の病院に降り立ち、ルインダを見つけ出し、そこに居た患者や病院スタッフたちと共に非難させ命を救った。

そして、ルインダと共に名前を変え、晴雄が果たせなかったルインダとの幸せな10年間の生活が始まった。

第14章 家族 その4（後書き）

本文はここまでです。長い物をよくお読み下さいますようお願いいたします

エピローグ

「カリーン、カリーン」と、教会の鐘の音が静かな林の中に響き渡った。

、教会の扉から新郎と新婦が腕を取り出てきた。

「おめでとう」と、外で待っていた友人たちがいつせいに花びらや、穀物などを二人の頭に降りかけている

その中に孝一や、圭子も混じっていた。

季節は初秋。

空はきれいに晴れ渡って、高原の教会にもさわやかな風が吹き抜けていった。

新郎はあつし、新婦は美奈代。

二人はこれ以上幸せは無いと言った顔で、満面の笑みを浮かべている。

今日の結婚式参列してくれた人達に「ありがとう」と、言って二人は更に引っ付き「私たちは幸せに暮らします」と、宣言した

二人の子孫がこれから1200年以上続く事を知っている二人は、これはささやかなスタートだった。

そして、晴れた空にポカリと丸い雲が浮いていた。

エピソード（後書き）

ご拝読ありがとうございます。20世紀のあつしと美奈代の話は、『雨の物語』で書かれています。読まれて無い方はどうぞ、『雨の物語』の方も読んで頂ければ幸いです。なお、感想なども書いて頂ければ、もっとうれしく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9307r/>

青い蝶

2011年10月8日15時06分発行